
付与魔法使いは迷宮へ

サンプル版

灯絵優

一部残酷な描写がありますので、自衛をお願いします。

この物語はフィクションです。
実際の人物や団体、事件などとは関係ありません。
本作品の一部、または全部を無断で複製、
複写、翻訳、転売、放送、
データ配信をする行為を固くお断りしています。

【サンプル用目次】

※一部、第一章まで収録しています。

【一部…付与魔法使いは迷宮へ】

【第一章】付与魔法使いはパーティを組みたい

【第二章】付与魔法使いと赤服の生徒

【第三章】付与魔法使いと三十六階層の壁

【第四章】付与魔法使いと暗黒魔法使いは邂逅する

【第五章】付与魔法使いと魔剣の継承者

【第六章】付与魔法使いと願いの代価

【第七章】付与魔法使いと迷宮の底に棲まうモノ

【第八章】 付与魔法使いにできること

【二部…付与魔法使いと星の光の眠る場所】

【第一章】 付与魔法使いと海底神殿

【第二章】 付与魔法使いと約束のオルゴール

【第三章】 付与魔法使いと幻舞踏

【第四章】 付与魔法使いと想望の勇者

【第五章】 付与魔法使いと裏切りの十六番

第一部◆【第一章】付与魔法使いはパーティを組みたい

「大丈夫ですか。しつかりしてください！」

十五歳の成人を迎えたミルは、ユグド領のウズル迷宮へ向かっていた途中で倒れている男性を見つけた。濃い藍色の全身鎧の男性は鎧の隙間から白い煙をあげている。魔導具か何かが故障したのだろうか。

揺ると、わずかに反応があった。

生きていることにほっとすると、意識が戻ったのかこう呟く。

「……み、水」

「お水ですか！」

とんでもない重さの体を仰向けに転がす。さすが重装備。これを揃え

られるなら財力もあるだろうに、なぜ行き倒れているのだろう。

既に息切れを始めた貧弱な体をふらつかせながら、『水グミ』——弾力がある透明な錬金アイテム。大量の水が入るが噛むか絞らないと中身が出ず、飲みにくいので人気がない——を取り出すと、すっぽり顔を覆っているバイザーを跳ね上げた。

とたん、

「あつづづづつ!!? 日光がつ、あづづづー!!」

「きゃあ!」

瀕死の魚のようだったのが嘘のように、尻から跳ね、顔面を両手で覆うと地面を転がり始める。

肉が焼ける音に狼狽えたのは一瞬で、杖を振るって魔法を使う。

周囲が一気に暗くなった。

「お、落ち着いて話し合いましょう。とにかくポーションを飲んでください！」

緑色の液体が入った瓶を取り出す。

男性は呻きながら飛びついた。

+

衝撃の一幕後、男性はすっかり元気な様子で水を飲んでいった。

道を外れた森の中、日の差さない場所に移ったので、今は蠟燭の明かりを頼っている。

「本当に助かったよ。ご親切にありがとう」

焼け爛れた顔がポーションで治ると、現れたのは惑わされるような美男子だった。赤い宝石のような瞳に青白い肌。髪は光を透かしても通りそうもない黒。襟足が長く、先がくると跳ねていた。二十歳くらいに見える。普通に笑っているだけなのに淫靡な印象をうけるのは、彼が吸血鬼だからかもしれない。厚めの唇から牙が覗いていた。

(なんだか動悸がします……)

彼の顔を見ると薄暗いのに目がちかちかするし、今の自分が見るには早すぎる。そう、年齢的な制限が必要なやつだ。明るい場所で直視したら失神するかもしれない。

そんな失礼なことを考えていると、彼は腰のポーチから銀貨を二枚取

り出し、目をそらしていたミルの手に乗せた。

「これは？」

「ポーシヨンと助けてもらったお礼」

「もらいすぎです！」

ポーシヨンは一本銅貨三枚だ。

「いいって。それより僕はシヤリオス。君は何て言うの？」

慌てているうちにシヤリオスは話題を変えた。

「ミルと申します」

シヤリオスは「ミルちゃんか」とぼやつと笑う。笑顔が眩しい。

「ちゃん？」

「うん。ちゃんって感じがする。駄目だった？」

「いえ、大丈夫です」

一瞬顔面の眩しさが起こした幻聴かと思ったが、現実だったらしい。

「見たところ新米冒険者さん？ この方向だとユグド領のウズル迷宮に行くところかな」

「よく判りましたね」

「ここ通る人は大体ウズル迷宮だから。可愛い杖もあるし」

ちよんと杖をつつかれ赤面する。

『ラビットロッド兎の魔法杖』の先は兎の頭をデフォルメしたような形で可愛らしい。

木製だが錬金術師の卵が作っただけあり、頑丈で、初期装備では考えられない効果も付いている。鑑定もせずわかるわけもないのだが。

実は可愛くて気に入っていたのを隠すように視線をそらす。

「これは妹と兄が作ってくれたものでして、私の趣味ではなく……若干ですが」

実家を出るまでのことを思い出す。

この国、ヨズルカ王国は十五歳が成人だ。将来の適性職を決めるため、十歳になると教会で鑑定を受ける。

結果、使えるのは光属性と無属性、時空魔法だった。どれを足してもマイナスにしなければならないハズレ属性。回復魔法を使えばよかったのだが、それは聖属性となる。

この結果に家族は驚いた。

なにしろ実家は錬金貴族と呼ばれる古い貴族家で、ミルはサンレガシ家の長女。爵位のないジェントリだが、歴代の一族が盛り立てた地位は

盤石。歴史的に見ても錬金術の適性がある者達ばかりなのである。

父は頭を悩ませ、母は泣いた。兄も妹もおろおろするばかり。

周囲がサンレガシ家始まって以来の落ちこぼれが出たぞ、と面白おかしくはやし立てるのはすぐだった。これではまともな結婚も望めない。

身を立てる方法を模索した両親だが、一般的な魔法使いはほぼ全て無属性をさせる。

時空魔法は研究が進んでおらず、有効な魔法は開発されていない。使
い手が少ないので当然だ。

さらに光属性は論外で、闇属性に効果てきめん顕面だが、モンスター相手では
攻撃力が出ない。対魔王退治しか真価を発揮しない属性だ。

魔王は既に封印され、地上は平和そのもの。

活躍の場がない三種類の魔法適性と貴族の身分が、市井で働く道を閉ざし、将来設計は大きく狂った。

最後は開き直って「ずっと家にいなさい！」と言う両親を振り切って、こっそり家を出たのである。

冒険者になって身を立てる。

そして家族を安心させようと考えたのだった。

今頃実家は大騒ぎかもしれない。抜け出すのを手伝ってくれた兄と妹が時間を稼いでいる間に、目的の場所へ行かなければ。

ミルが薄緑色の目をキラリとさせていると、長い金色の髪が風に揺れた。

微笑ましそうな表情のシャリオスが立ち上がる。バイザーを下ろし、

蠟燭を吹き消した。

「僕もユグドに帰る途中だったんだ。暗くなるとモンスターも出るし、そろそろ行こうか」

「今はまずいと思います。失礼ですが、シャリオスさんは吸血鬼ですよ
ね？」

ヨズルカ王国に吸血鬼が住んでいる話を聞いたことはないが、彼らが夜の明けない国に住んでいるのは聞き及んでいる。太陽は彼らの弱点だ。今は昼前、これから日差しがきつくなる。

「だだだだ、大丈夫だよ」

たぶん、と小さく呟くとチラリと疑い顔のミルを見て、情けなく項垂れた。

「やっぱり駄目かも。でも夜まで何があるかわからないし、一人になるのは怖いし」

「何かあったのでしたら、事情をお伺いしてもいいですか？」

頼られていることに驚くが、爛れた顔を思い出し込み上げるものを飲みこむ。置いて行かれるのを怖がっても仕方ない。どうして故国を出きたのか判らないが、やはり事情があるのだろう。

挙動不審になっていたシヤリオスは「実は——」と話し始めた。

どうも仕事先で依頼人の男に部屋へ連れ込まれ、あわや貞操の危機に陥ったらしい。逃げ出したが、日が昇って行き倒れてしまったという。

ミルは絶句した。都会の恐ろしさに触れた気がする。それから身震いするシヤリオスが気の毒になった。さぞ怖かっただろう。

「旅は道連れ、世は情けです。ここで会ったのも何かの縁、ご一緒しましょう！」

「ありがとう！ 初対面なのに本当にありがとう！」

気が動転している二人は手を取り合い、一緒にユグド領へ向かうこととなった。

「吸血鬼は光が駄目でしたよね。よければ屈折させます」

「そんなことできるの!?! もしかして光魔法の適性があったりする？」

ぶち込まれたら一発で昇天しそうだけど平気かな」

「攻撃力はないですよ」

吸血鬼は太陽も駄目だが光魔法も弱点だ。他にもあるが個体差があるらしい。

心配顔だがシャリオスが頷いたので、杖を振る。光を屈折させる程度なら詠唱もいらぬし、魔力消費も少ない。

「少し手を出してみてください」

恐る恐る木陰から手を出したシャリオスは首をかしげた。

「痛くない」

「ゆっくり日の下に出ただけですか。痛かったら角度を変えます」

「うん。……わ、凄いなこれ。《纏う闇》^{ダークネス}使わなくても痛くない！ あ、

《纏う闇》^{ダークネス}って影を操る魔法。鎧の中に光が入らないようにしてるんだ。

日中出歩く吸血鬼の必須魔法」

しかし魔力消費が多く、魔力切れを起こしている今は使えないのだと

言う。

「夜みたい昼間歩くの始めてだ！ バイザー上げてみてもいいかな」

「目玉焼きができたら怖いので止めませんか」

手に『ラビッドロッド兎の魔法杖』のウサ耳部分を当て押さえる。

ミルの眼圧にシャリオスはがっかりした。

「そうだよ。眼球焼けてポーション飲むのよな」

「不調が出たらおっしゃってください。歩いてる対象にかけるのは初め

てなので……」

「わかったよ。ところで、光魔法の修行ってどういう感じなの？」

「他の属性と一緒にです。ただ先生が見つからなくて我流なのですが……」

でも迷宮に潜ってレベルを上げれば、きつと新しい魔法の発現とかが

あって、私にもできることが見つかるはずです！」

冒険者になって身を立てるには必要だ、と力強く拳を握る。

レベルアップとは生物の格を上げることだ。時折新しい力が出現する。修行によってある程度上がるものの、ミルは教師が見つからずレベル一のままだ。

レベルは教会で鑑定すれば見てもらえるが、お布施が必要になる。その点、迷宮ギルドに登録すれば無料だ。仕事も斡旋してもらえる。

「頑張り屋さんなんだね。僕も負けないようにしないと直ぐ追い越されそうだ」

「シャリオスさんも、新しい力に目覚めたい系男子のですか？」

なんかちよつとその言いかた嫌だな、と思いながら答える。

「僕が迷宮に潜るのは魔導具が目当てなんだ。昼に生きる人達が見てい

るのと、同じ物を見てみたいんだ。僕は夜の景色しか知らないし、絵でしか見たことがないから」

「素敵ですね！ 迷宮はアイテムがドロップすると聞きましたが、そういう物が出るのですか？」

「まだわからないけど、最下層まで突破したいと思ってるんだ。ウズル迷宮で出なかったら別の迷宮に拠点を移して探すつもり」

鎧越しの視界はどうかと問えば、バイザーに着いた色ガラスが日光から目を保護しているという。視界が暗くなるので、絵で見るような景色は見られないのだそうだ。

「一生を賭けて叶えたい夢なのですね」

「そうなんだよ！ もちろん生活のためもあるけどね。速く最下層に行

きたいな」

迷宮は不思議なアイテムが出ることで有名だ。最下層ともなれば、珍しいアイテムも出るかもしれない。迷宮は願いを叶える場所という迷信があるほどだ。

最下層到達はそれだけで栄誉と名声をもたらす。一攫千金を夢見る冒険者や、未知のアイテムを求めて入る者、研究資料を探す魔法使いなど、様々な人種が入り乱れ華やいでいる。

澗刺とした声が希望に満ちていて、聞いているミルも力が湧いてくるようだった。二人はその後も話題を変えながら歩いていく。歩き通しで痛む足も気にならない。

途中で喉が渴いたと言うシャリオスに、最初あげようとしていた『水

グミ』を差し出す。物資の補給もせず、急いで逃げてきたシャリオスは喜んだ。

「もし面白い魔導具を見つけたら教えてくれる？　目を避けるものじゃなくてもいいから」

「かまいませんけれど、魔導具好きですか？」

「技術もだけど発想力を見るのが好きなんだ。純粹にかっこいいのもあるし！　最近はトルトン導師が作った年中花見ができる魔導具が凄くて！　幻想を魔法に込めて、いつでも体感できるようになってるから楽しいんだ」

「極東の夜桜のなら見たことがあります。トルトン導師はお上手ですよ。感性が豊かなんだろうなと見ていて思います」

「知ってるんだ！ 凄いよね、リアルで。情景と一緒にふわっと香りもして——」

話し出したシャリオスが止まらない。

ミルは名家出身であり、礼儀正しく相手の話を聞いてしまう癖があった。子供のように嬉しそうな声を聞いていると、口を挟みにくかったのもある。

シャリオスは聞き上手なミルにますます声を大きくし、ユグド領に着く道のりの中、会話が途切れることはなかった。

『水グミ』のおかげで喉が渇かなかったのだろう。

三時間以上に及ぶ魔導具談義を終え、二人はユグド領が見える場所ま

でやってきた。日が高く昇って、お昼を回っていた。

大きな白い石の関所に長蛇の列ができています。建物の屋根は緑とオレンジで、壁向こうの都市から潮風の香りが流れてくる。ユグド領は海に面しているため、漁業も盛んであり帆を張った漁船が遠目に見えた。

「凄い列ですね！」

「朝から並んでた人達かな。今日から一週間、市場が開放されるんだ。

港町から来る人も多いし、中はもっとたくさんいるよ」

と言われて驚いてしまう。

「ご飯は美味しいし、珍しい輸入品も手に入りやすい。領地の経営も安定してる。迷宮と輸入品で成り立ってるんだって。城門で入領手続きをしてくれるよ。ギルドは初めてだよね？ 案内してあげられたいけど、

ミルちゃん始めてだよな？ それだと手続きがあるな……。ギルドに登録してればすぐに入れるんだけど」

「私のことは気にせず行ってください。変態が迫ってきてるかもしれないし」

「ごめんね！ 一緒に居るのを見られたらまずいし、ここまで一緒に来てくれて本当に助かったよ。これ、僕が寝泊まりしてる宿と連絡先。もう行くね。ミルちゃんに迷宮の加護があらんことを」

「え？ はい！ シャリオスさんにも、迷宮の加護があらんことを」
冒険者の挨拶だと気づいて返す。

バイザーでわからないがシャリオスは笑っているようだった。真っ直ぐ関所に行き、何かを見せるとそのまま入っていった。冒険者証だろう。

微笑みながら見送って、最後尾に並ぶ。商人が多く、馬車が何台も並んでいた。

一人になると、とたん寂しい気持ちになる。家を出て道を歩いていたときのような。独り立ちしたのだから、しつかりしなければ。今は家族や自分の未来のために、齒を食いしばってでも頑張るとき。ミルは表情を引き締めた。

順番が回ってきたのは夕刻で、持っていた保存食を口にして空腹を紛らわせた。

兵士は膝ひざまである鉄靴に手っ甲、灰色と黒のマントをしている。マントの裏地は赤く、腰には支給品の剣を佩いていた。

繰り返される質問に答えていく。

「出身はリスメリット領のサンレガシ家。ミル・サンレガシ様でお間違
いありませんか。目的はウズル迷宮の攻略で」

「間違いありません」

受付の兵士が手続き用紙に書きこむ。

「ギルドの登録歴はありませんね。領内に入りましたら、真つ直ぐ迷宮
ギルドへ行き、ギルド証を発行してください。その場で仮登録書の返却
をお願いします。二日以内に発行しないと仮登録書の期限が切れますの
で、ご注意を」

「わかりました。お手数ですが道を教えていただけませんか」

「送らせましょう。——ズリエル、こちらの淑女を迷宮ギルドまでお送
りしてください。今日は早上がりの日だったでしょう？ そのまま帰宅

してかまいませんので。上司には私から伝えておきます」

「了解です！ ではお嬢様、後ろに着いてきてください。道が混んでおりますので」

ズリエルという兵士は背が高く、がっしりとした体系の男性だった。短く刈った髪は青く、頭の側面に獣耳があることから獣人なのだろう。マントの裾下から青い尻尾の先がチラリと見えた。

「次の者、前へ出て要件を手短に！」

兵士の厳しい声にびくつきながら、ズリエルを追いかけた。キビキビとした足取りに、油断ならない視線で通行人を見ている。まるで監視しているような鋭い目つきだ。

「獣人を見るのは初めてですか」

眺めていると話しかけられ、慌ててしまう。無意味に手の平を振っている、顔半分振り返ったズリエルと目が合った。

「失礼しました、不躰にじろじろと……」

「いえ、馴れておりますので。しかしユグド領には多くの種族が住んでおりますので、珍しくとも直ぐに視線を外すようお願いします。トラブルの元になりますので」

「わ、わかりました」

「街に入りますので、よければマントの裾をお掴みください。人が多くなります」

都会には色々あるようだ。

慌てて握ると、ズリエルは一度止まり左右を見た。疑問を覚える間も

なく再び歩き始める。

関所をくぐるには二つの入り口を通る必要がある。一度目は受付をした場所。あそこで身元を確かめられる。

もう一つは木造でできた柵があり、出入り口の両端に兵士が立っている。監視だろう。

手前の大きな建物でもう一度調べられる。一つ目の入り口を素通りした人でも同じようだ。何をしに出ていたのか、または領地に入る目的などを聞いている。

行列は一度目と違い早く進み、順番が回ってきた。家名を名乗った途端、受付の態度が丁寧になる。貴族だからだ。それは明確な差となって現れていた。

そつと振り返ると、外に出る者を調べていた兵士の一人が視線を外したところだった。

ズリエルは問題を起こす貴族かどうか見るための監視だろう。故郷では考えられない兵士達の行動は、ユグド領の治安がそれだけ悪いからだろうか。

ちなみにこれらはミルが考えたのではなく、頼れる兄の入れ知恵である。

「ここから大通りになります。石畳があるのでわかりやすいかと」

「わあ……人がたくさんいます」

端が見えないほどの人ばかり。お上りさん丸出しで感嘆の声を上げてしまう。

石を敷き詰めた道の上を馬車や人が行き交い、出店や露天が立ち並ぶ。活気ある風景に圧倒されながら進んでいくと大きな茶色の建物に着く。出入り口の横に掲示板があり、雨よけの屋根が付いている。他の建物より大きな入り口から、ひっきりなしに人が出入りしていた。魔法使いのローブに、マント姿の剣士。荒っぽいヒゲ面の男から、ミルより年下に見える子供達まで様々に。もちろん種族も色々だ。

看板に迷宮ギルドとある。

「中へ入りますので、マントを返していただいても」

「すみません！　ありがとうございますました」

慌てて離し、寄った皺を引っ張る。

一瞬止まったズリエルに気付かず、キリリとした表情で後続に続いた。

ギルド内は床に泥や汚れが目立っていた。汚れて帰ってくる冒険者のせいだろう。受付や内装は綺麗で、観葉植物もある。二階に続く大きな階段を見上げると、上からも賑やかな声が聞こえてきた。

見回していると、一番近い受付にズリエルが並ぶ。六人の冒険者が並んでいた。迷宮帰りなのか、装備品に土が付着している。鱗や尖った耳に目が行くが、不躰にならないよう自然に目を離した。

「夕刻は迷宮から帰ってきた冒険者で混雑しますので、しばしお待ちいただけますことになるかと。本日の宿の予定はありますか」

「まだ決まっていなくて。そう言えばラーソン邸という宿泊施設はどういった所ですか？」

「ラーソン邸ですか。……一級冒険者専用の宿泊施設です。御領主様が

お支払いになっていきますので、認められた者しか宿泊できません」

「そうでしたか」

ただの冒険者は泊まれない施設なら、シヤリオスは凄いい吸血鬼なのだろう。有名人といきなり知り合ったのかとドキドキしたが、ようやく回ってきた順番に考えている余裕はなくなった。

「こちらは本日いらっしやった、ミル・サンレガシ様だ。新規登録と宿の紹介を頼む」

「承りました」

受付の女性は柔らかい笑みを浮かべる。口元にホクロがある白い肌の人族だ。髪は薄ピンク色で、スプラと名乗った。

「では、私はこれで」

「ありがとうございます！」

短く返礼をしたズリエルは一瞥もせず颯爽と迷宮ギルドを出ていった。

「それではご登録の方進めさせていただきます。仮登録証を拝見いたしますね」

椅子に座ると、手続きが進んでいく。

「では迷宮ギルドのご説明をさせていただきます。ギルドは基本的に全ての職業を斡旋していますが、ユグド領にはウズル迷宮がございます。スムーズな業務のため、迷宮ギルドだけ別館にて運営しております。別の業務を張り出すこともあります。迷宮外の業務をする場合は、お手数ですが南ギルド本店へご来店ください」

ギルドが斡旋する業務は、売り子から専門業種、領主への兵士の斡旋

など様々にある。全て履歴書に記載され、ギルド証に情報として積み上がっていく。情報は全てのギルドでも共有されるようだ。

窓口は多岐にわたり、目的に応じて商業、迷宮、冒険者、魔法使いなどに別れる。買い取りカウンターや休憩スペースもあった。そして迷宮が無い領地に迷宮ギルドは存在しないが、他領の迷宮へ潜るとき、冒険者で登録していれば問題なく入場できる。

事前に調べた情報とすりあわせをしながらスプラの話聞いていく。登録自体はどこでもできるし、どこにでも買い取りカウンターがある。銀行経営もしているのでギルド証で支払いもできるらしい。ただし専用の魔導具がある店だけなので、普通は現金でなければならぬようだ。話は領内の治安や道具屋にまで及んだ。話しているうちに書類を元に

ギルド証ができあがり、初心者講習の申請手続きも同時並行で進められていく。

「講習は週に三回ございます。受付は二階となっておりまして明日の十時までに受付をおすましくございますよう、お願いいたします。こちらが発行したギルド証となります。再発行には銀貨三枚必要になりますので、ご了承ください」

「ご丁寧にありがとうございます」

ギルド証はミルの手の平よりも大きかった。

名前とランク、識別番号などが書いてある。登録ギルド種別というのがある、そこに迷宮と冒険者ギルドと書かれていた。登録した場所の記載もある。

ミルのランクはBだ。初心者講習を終えるとBになるのだという。講習には銀貨一枚必要だ。講習で職業種別や適性を決め、ギルド証に記入するのだそうだ。

少し憂鬱になるのは仕方ないだろう。ミルの適性は付与魔法使いに決まっている。

「あの……依頼についての質問はどこですればいいのでしょうか」

「受付で対応いたします。この件は講習内容でより詳しく説明される内容となるので、お忙しい場合は明日お聞き願えればと思います」

「わかりました。ありがとうございます」

ミルは自分の持ち金の半分をギルドに入れ、紹介してくれた宿へ向かうことにした。

スプラがじきじきに案内してくれた宿には、既に話が通っていた。ミルの所持金でも何とかかなりそうな宿で、お風呂と鍵付きの部屋が売りだと言う。食事は別途料金だ。迷宮に潜り続ける冒険者も多いかららしい。ベッドと小窓、調度品がいくつもあるだけの部屋だ。水は別途料金だが、魔導具があるので風呂には困らないだろう。今日からここがミルの城である。

「水は迷宮の中に川があるから汲むとして、火は着火用のがありますし……」

荷物を解いたミルは大振りの鍵を取り出す。

『あなただけの部屋』だ。

どうしても迷宮へ行くと言うミルに、兄が自作の鍵をくれたのだ。部屋の鍵穴に通すと、銀色の鍵が金色へ変わる。これでミルが招いた人でなければ入れなくなった。

「あとは調合道具の確認と、明日の準備ですね。いらぬ物は出さない
と……」

背負っていた大きなリュックを下ろし、中から灰色の中着を取り出す。これはマジックバッグだ。その中に入れていた別のマジックバッグを取り出す。

一つでも財産になる魔導具を大量に持てるのは、歴代の一族の練習作品だからだ。私的使用しかできないので借りてきた。おかげで関所の検査で目録を出すと、ぎよつとされたくらいミルの持ち物は多い。

荷物を入れ直す。

準備が終わると『水差^ジし魔導具^グ』から出した水と、『温水石^カ』で沸かしたお風呂にゆつくり浸かる。『温水石^カ』は水をお湯にする魔導具だ。

湯船に肩まで浸かると体の芯がほぐれていく。たくさん歩いてむくんだ足もよく揉む。

「ふいー。今日は早く寝ないと」

鼻先まで浸かってぶくぶくと空気を吐きながら、ミルはトロトロの顔をしてお風呂を堪能した。

ブーツを履き、ズボンの上にスカートを重ねる。マジックバッグはマントの下に隠し、荷物も確認した。

今日から第一歩だ。

「行きましよう！」

部屋の鍵をかけると『あ^ルなた^ダだけの^ム部屋』を首に提げる。

一階に降りるときよろりとした目をした宿の店主——ドーマが居た。瞼から顎にかけて大きな傷があり、全身盛り上がった筋肉に包まれている。妙な威圧感があり、緑色のエプロンをしていなければ強盗だと思っただろう。鳶色の髪を刈り上げていて、目が合うと「よう嬢ちゃん」と低い声で挨拶をしてくる。

背の低いミルは見上げるしかない。

「お、おはようございます」

「飯は食うのか。今日はサンドイッチだぜ」

「お、おね……がいします……」

ドーマが手の平を差し出す。

「銅貨五枚出しな」

「……」

カツアゲみたいだ。

そんなことを考えつつ大きな手に銅貨を乗せる。冷や汗が垂れた。

他の泊まり客は見当たらず、店内は寂しい。好きな席に座ったミルの元へ、サンドイッチが盛られた大皿がやってくる。当たり前のように山盛りで、丈夫そうな分厚い皿が音を立てると同時に尻が数センチ浮く。

「ひい」

と言っている間にドーマは厨房へ去って行った。

都会っているいろいろな人がいるのだな、と思いながら美味しそうなサンドイッチに視線を落とす。卵サンドである。

「おいひいれす」

スプラが「食事が美味しい」と言っていたのは本当だった。

食べきれなければ持って行っていいと言われていたので、防水布に包んでマジックバッグの中に詰めこむ。

食後に出てきた熱い薬草茶をちびちび飲んでみると、お腹の中が暖かくなってきた。

「夕飯前に帰ってこい。市でヤベえ奴らが大勢来るからな。治安が悪くなる」

「は、はいっ」

油断していたところに声をかけられ背筋が伸びる。

一番危険そうな顔のドーマに言われるとは、もの凄く危険人物に違いない。ゴクリと生唾を飲んだミルは玄関から頭を出し、慎重に左右を見回すと、そろそろと宿屋を出た。

迷宮ギルドは早朝から混んでいる。

十時前に着いたミルは昨日より増えた人だかりの中を這い出て、何とか二階に上がった。二階の内装も一階と変わらず木製だった。受付前に「初心者講習はこちら」と書かれた看板があり、受付を済ませる。

「それでは緑の番号札をお渡しします。お時間になりましたら受付から声をかけますので」

壁際にある椅子に座ったミルはしつかりと荷物を抱え込んだ。初日からスリ強盗置き引きその他犯罪に遭って、時間を浪費するのはごめんだ。子猫のように固まっていると、希望に満ちた少年少女達や、こなれたお兄さん達が呼ばれていく。彼らは青や赤い緑の番号札だった。

緑の番号札は他におらず、一人で待つこと一時間。忘れ去られているのではと心細く思っていたところで呼ばれた。

「大変お待たせしました。こちらにお進みください」
角を曲がって案内されると、外へ続いていた。

ギルドの裏庭だ。剥き出しの地面が広がり、壁が建てられている。

その中心に老人が一人いた。腰が曲がり、小刻みに震えている。手招きをされて近づくと、ミルとほとんど同じ身長だった。白いローブと尖

り帽子、木の杖を持っていて、たっぷりの髭が顔の半分を覆っていた。

「遅れてすまんかったの。ワシはヘテムルと申す者じゃ。光属性持ちが来たのは二十年ぶりじゃて、担がれとるかと思つてての」

それで遅れたのだと一人で頷いている。

二十年ぶりと言うから光属性持ちはやはり少ないのだろう。対魔王属性なので活躍の場ないほうがいいのだが、これから思うと心が重くなる。

「それで、私は何をするのでしょうか」

「魔法がどこまで扱えるかみるんじゃよ。では始めようかの。魔法は光属性、無属性、時空魔法の三つでよかったかの？」

「間違いありません」

「古典的な付与魔法使いじゃね。別の属性魔法あれば何とかなるんじゃないが、光属性はちいと難しい」

へテムルがとん、と杖で地面を打った。足下に魔方陣が広がり白く発光する。

「まずは初期魔法を見ようかの。先生に習わなかったんじやろ。ワシと一緒に基礎確認じゃ。まずは魔力を練って〈光〉^{ライト}」

「ら、〈光〉^{ライト}！」

同じようにすると、ミルの足下に魔方陣が広がった。

「そのまま杖の先に光を集めなされ」

ぐぬぬと踏ん張りながら魔力を移動させると、小さな球体となって

『^{ラビッドロッド}兔の魔法杖』の耳の先に集まった。

「よしよし、上出来じゃ。どんどん行くぞい」

ミルの能力を確かめるようにヘテムルがどんどん魔法を実践させる。時空魔法と無属性も順番に試していく。

「光魔法以外は中級レベルと。頑張って勉強してたんじゃね。自主トレ用に教材買ってくかの？」

「光魔法は攻撃できないのでちよつと……」

「そうかの。ならこれはお爺ちゃんからのプレゼントじゃ」

「えっ、いいのですか！」

ヘテムルがローブの裾から出したのは四冊の分厚い魔法書だった。それをそっくりくれるとはどういう理由だろうか。

「ワシも歳じゃから動くのはキツイ。それにお嬢ちゃんが立派な光魔法

使いになってくれたら、代わりに初心者講習やってくれるじゃろ？」

「二十年に一回くらいじゃけど」と言われて苦笑する。

「初級編と中級編、上級編と特上級魔法書じゃ。最後の一冊まで行ったらワシに教えておくれ。ちなみに一冊金貨四枚じゃから失くしても全然手にはいらん。早めに写しておくんじゃぞ？」

「ありがとうございます、お爺ちゃん先生！」

金貨四枚分の本が四冊。とてもありがたい話でミルはやる気になった。現金な子供に好々爺のように笑いながら、ヘテムルは初心者講習はこれで終わりにすると言う。ミルの持っている魔法は光属性以外初心者領域を出ているので、あとは実戦経験を積むのを大切にするように言われた。光魔法は本に書いてあるとおりに実践すれば初級編は終わると言う。

遠くの街からわざわざ飛んできたヘテムルは、講習レポートに判子を押しすと、受付に持つていくように言う。そして杖を振り、風魔法《飛べフライ》を使つて帰つて行つた。

「いいなあ風属性……いけないわ。早く手続きを終わらせましょう！」
講習の結果を伝えると、受付の女性が不憫そうな顔をした。

「改めて更新手続きをしたギルド証をお渡しします。本日から依頼を受けますが、先に依頼受理に当たつての注意事項をお話しさせていただきます」

受け取つたギルド証のランクが㊦から㊧に変更された。そして職業種別には付与魔法使いの文字が。

わかつていたが辛い。パーティを組めるか心配になつてしまう。

「お願いします！」

ミルは落ち込みそうになる自分の頬を叩き気合いを入れた。

「来たな」

「ひい」

夕暮れになってしまった。

急いで宿に入った途端、この世と今生の別れをさせてやるぜ、と言う表情で歓迎されたミルは仰け反った。ドーマにそんなつもりはないだろうが、にやりと笑う顔が怖すぎた。

「も、戻りました」

「メシはできてるぜ。さっさと荷物を置いてきな」

投げ寄越された鍵を握りながら二階へ上がる。

宿の奥から一番目の部屋がミルの部屋だ。解錠した後、『あなただけの部屋』を差しこむと扉が開く。さっと荷物を置いて服を着替えた。

一階から漂ってくる美味しそうな香りに頬を緩ませる。先ほどとは違い、店内に別の客が入り、食事を始めたところだった。男性二人、女性三人組だ。

向こうも気づいたようで、食事を並べていたドーマに声をかける。

「閑古鳥だと思っただらいるじゃない。ちょっとは顔面に優しさ足せた？」

「ふふー！」

「俺達も人のこと言えないけどな！」

「何ですってアンタ!?!」

「食事中は静かにしてください」

灰色髪の方がからかうと、長い赤毛の女性が吠え、緑髪の女性がイライラした様子で二人を睨む。残りの二人は食事に集中しているのか、ほとんど器に顔を突っ込んでいた。宿の食事が美味しいのはわかるが、がつつきすぎじゃないだろうか。

思わず圧倒されていると「座って食え」とドーマに命令され、訓練された兵士のように素早く椅子に座る。

本日の夕食は、朝のたっぷりサンドイッチと同じくらい量があるオムライスとスープだった。ミルの顔より大きいかもしれない。他の客も同じなので、ドーマの宿はメニューが一つしかないのだろう。思い返すと

メニュー表を見たことがない。

「いただきます」

スプーンを刺すと表面の卵が割れて、トロトロの半熟卵が流れていく。コクのあるソースは少しだけ苦かったが、ケチャップライスと一緒に食べると、お米の甘みが出て美味しい。

初心者講習の後に言われた注意事項は、迷宮で歩くときの警戒方法だった。他にはギルドの施設案内や買い取りリスト、四十階層までの地図が販売されていることなどを教えてもらった。

ミルは十階層までの地図を買った。銅貨二枚で、階層が下になるにつれ値段が上がるといふ。

まず採集をしてみてもどうかと言われ、常時募集している薬草採集を

受けた。納品時に料金が支払われるため、いつ採ってもいい。薬草採集のときの手順や注意事項も聞いたので、現地で試行錯誤することになるだろう。

「明日はどうすんだ」

「ひえ」

向かいにドーマが座ると、ミルの尻が椅子から数センチ浮く。

薬草採集をするというと、後ろの冒険者達が「兎に気をつけろ」など助言をしてくれる。

「俺もガキの頃やったんだけど、あいつらしゃがんでる時に限ってケツに角刺してくるんだよ。四つに割れるかと思っただぜ」

「きゃはは！ あんた昔から馬鹿だったのねー？ そのおかげで頑丈に

なったのかしら」

「食事中に下半身の話をするの、止めてください」

「……まあ、気をつけてやんな」

「あ、はい。ありがとうございます！」

すつと巨体が消え、圧力と熱気が消え去った。

ミルは食事を再開し、たくさん頭を使ったせいもあって。ペロリと大盛りふわふわオムライスを完食した。

二階に戻ってお風呂に入ると、残り湯で洗濯をして装備の点検をした。

明日は初めての迷宮探索。

ちらりとヘテムルから貰った四冊の本を見る。

光魔法の初級編から特上級の本だ。写すなら夜と朝がいいのだろうか。

インクが乾くまで待たなければいけない。

「よーし！ ……紙が無いから買ってこないとですね」

買いだしリストに記入すると、所持金と見比べ、ぐぬぬと唸った。早めに依頼をこなし、お金を稼がないと宿無しになってしまう。

すぐに実家に帰るなんてできない。

お布団に潜り込みながらもんもんと考えた。

翌朝早く目が覚めたミルは朝食の半分をお弁当用に、宿を出る。

「よし、いってきます！」

「夕食前に帰宅しな」

元氣よく左右を見回してから出ていくミルを、生暖かい目のドーマが

送り出した。

ウズル迷宮の入り口は、岩を三角形に削り出したような形をしている。見上げるほど天井が高く、ゴツゴツした岩肌が剥き出しのままだ。

強そうな冒険者達に混じって順番を待ちながら進んでいく。一階層はユグド領の周辺とよく似ていた。柔らかな草原に小さな森。出てくるモンスターは弱く、虫型や動物型だけだ。ゴブリンなどの有名なモンスターは三階層から出てくる。

小川には幻バンタシア・デイエ蝶の群れが飛んでいる。親指の爪くらいの大きさしかない虫のモンスターだ。鱗粉で痺れるが全身が麻痺したりはしない。地上でも見かける種類だ。

「それにしても綺麗な空……ずっと晴天が続いてるなんて不思議です」
迷宮の中なのに、空も風も感じる。

と、視線を感じ横を向く。

手に乗るくらいの大きさの兎がいた。毛が薄青く額に角がある。
角持ポーンラビットつ兎だ。一階層で出会う、少し危ないモンスターである。

思わず杖を構えると、角持ポーンラビットつ兎は鼻をヒクつかせたあと、長く伸びた
草の陰に潜り込んで見えなくなった。

「何だったのでしよう……。とにかく水を汲まなくちゃ」

ミルは周囲をよく見ると杖を振った。

「《障壁》ウォール」

無属性魔法を唱えると、足下から背中まで透明な壁ができる。杖でつ

つくと堅い音がした。強度はわからないが、上層のモンスターなら防げると聞いたのでしつかり周囲を覆う。

マジックバッグから『水差し魔導具』を取り出して小川に沈めると、
どンドン水が中へ入っていく。

「よし、満杯」

水滴を拭って立ち上がるうとした時だった。背後から足音がしたかと思えば堅い物を叩くような音が連続する。

ぎよっとして振り返れば、角持つ兎が七匹も目を回して倒れていた。

「もしかしてお尻狙ってました!？」

おののいていると、目に傷のある角持つ兎が草陰から姿を現す。普通の角持つ兎より二回りも大きく、歴戦の戦士の風格を持っていた。

「ピーー！」

「きゃあああ！」

突撃してきた角持つ兎ポーンラビツトが障壁に当たり、角の先が食い込んだ。抜けな
いようで、角持つ兎ポーンラビツトは慌てたように藻掻く。

「……。これも自然の定め」

しばし言葉を失っていたミルは、手足が短いせいで脱出できない様子
に呟く。周囲を注意深く窺いながら、解体用を角持つ兎ポーンラビツトの首に滑らせた。

力なく垂れ下がっている角持つ兎ポーンラビツトをも悲しく見ながら、他の個体が
起き上がらないうちに同じように処理していく。勢いよくぶつかりすぎ
て角が折れている個体や、そもそも首の骨が折れて死んだ個体もいた。

障壁の強度が証明されものの、ミルはなんとなく悲しくなった。初め

てのモンスターとの対決は、怯んでいる内に終わってしまった。怪我をしたかったわけでも、心構えもできていなかったが、これいじゃない感じがする。

毛皮を剥いで内臓を分類し、綺麗に洗って瓶に詰めていく。鍊金貴族は素材の処理も仕事のうちだ。ミルもよく父親の手元を見ていたので、簡単な解体なら数回繰り返せば滑らかにできるようになった。

「初めてにしては上出来です！ そろそろ薬草を探さないと」
小川の一部が赤く染まるほどの収穫量だった。

地図では小川の南、森の中に群生地があるらしい。

手を拭くと森の中へ進み始めた。

「これでしょうか」

しやがもうとしたミルは、はつとして周囲を障壁で覆う。

薬草の特徴と一致しているし、色もいい。

教えて貰ったとおりの処理方法で採取する。納品は十本一束からなので、あと九本必要だ。

ときどき上を警戒しながら進んでいくと、森が切れて見晴らしのいい場所に出た。木の根元に座ってお昼ご飯を食べようとしたとき、地面が不自然にかき回されているのに気付く。

「土ランド・ビの巣？　《障壁ウォール》！」

蜂蜜がたっぷり採れると聞いたことがある。

杖の先をゆっくり鎮めると、灰色の蜂が現れた。拳大ほどの大きさである。

土^{ランド・ビー} 蜂は弾かれても何度も突進してきた。お尻の針を飛ばすが、障壁を割ることができない。針を飛ばした土^{ランド・ビー} 蜂が次々に絶命していく。

やがて一匹も出なくなった頃、巣から出てきた女王蜂が飛び去っていった。

「自爆するモンスターが多いのでしょうか」

再びもの悲しい表情で見送ったミルは、周囲の死骸を集めて瓶に入れた。これはお酒の材料になるし、針は裁縫用に加工するため需要があると聞いている。

集め終わったミルは、手袋を填めて土をかき分けた。巣をゆつくりと持ち上げると、中にいる白い幼虫が蠢いていたので、そのまま布にくるんだ。マジックバッグには生きものは入れられないが、「^{ストップ}止まれ」^ブと

いう時空魔法をかけると話が変わる。

「薬草はまた今度にしようかな」

中に入れられたことを確認したミルは、慌てて迷宮ギルドへ戻った。思ったよりモンスターと会う回数が多かったのである。

十

「次の方どうぞ」

ギルドの買い取りカウンターで、丸眼鏡の青年が疲れたように顔を上げる。昼過ぎから長蛇の列だ。一週間市場が開放される影響で、迷宮産の品物を買収めようとしている商人を狙って、迷宮に潜る冒険者が多

くなっている。彼らの読みは当たっていて、需要も伸びていた。

「こちらをお願いします」

ギルド証をちらりと見た青年は、布を剥いで目を丸くした。

「ランド・ビー土蜂ですか？ 珍しいですね」

ランド・ビー土蜂の蜂蜜は高級食材だが、蠢いている幼虫を見て真顔に戻る。

「……生きてますね」

「生きていると駄目でしょうか」

「駄目じゃないですが驚きました。少し失礼します。——おーい！ 幼

虫の数お願いします！」

後ろで買い取り品を運んでいた職員達が「うえー！」と嫌そうな声を出した。

「すみません、今かき入れ時です。他のも全て出してください」

「あ、はい。ポーンラビット角持つ兎です」

「これは全部解体されていますね。丸ごとだともちらも助かります。解体料徴収できるんですが忙しくて。お客様は、今日初めての買い取りですよね？ こちらの品は、全て別の瓶に移し替えさせていただきます」

さらさらと書類に文字を記入する。と、後ろの職員に二、三言葉をかけてその場で中身を移し変えていく。

「それでは全部で銀貨二十四枚と銅貨七十八枚です。またのご来店をお待ちしております」

丁寧な頭を下げて見送られる。

ミルは銀貨は全て預け、銅貨を財布に入れると迷宮ギルドを出た。

(帰りに紙を買って帰らないと)

それに、市場も見てみたかった。

大通りは恐ろしく混んでいた。

「ま、前が見えない……」

なんとか人にぶつからないよう進んでいたが、よろよろだ。夕方なので迷宮から出てくる冒険者もいる。一番混んでいる時間帯だ。

「あった！ 紙のお店」

店の出入り口には男が二人立っていた。紙は高級品だからだ。

小さいながらもしっかりした木造の店に入ると、恰幅のいい店主がいた。カウンターの奥に敷き大量の引き出しがついた棚がある。そこから

紙や便箋を取り出して売るのでろう。

「ほら客が来たんでな、帰った帰った！」

五月蠅そうに顔をしかめて、犬を追い払うように手を振る。

冒険者の身なりをした少年がカウンターに乗り出すように言う。

「そこをなんとか頼むよおっさん！ 急いでるんだってばー！」

「客じゃない奴は帰れ！」

「代筆代は出すよ！ ちゃんとあるのわかってんだろ」

「ここは紙を売る店だ。代筆なら店に行けばいいだろう。——お客様、すみませんねお待たせして。どのような商品をお求めですか？」

「え、ええと……」

チラリと横を見るとブスくれた少年がミルを睨んでいる。

「修正用の白インク一つと白紙の紙を。両面に文字を書くので透けない物をいただけますか。表紙用の紙を四枚つけて、おいくらでしようか」
枚数を聞くと、店主はほくほく顔になった。

「銀貨二十四枚になります」

「ま、待ってください！ その紙は白い紙の中でも質が悪くありませんか？ さすがに二十四枚は暴利です。表紙もインクも二つ合わせて銀貨十四枚が妥当です！」

「何を仰いますか！ この白インクは上質な白炭から作り上げた物ですし、表紙用の紙も表面はツルツル。破れにくく分厚い、いい品ですよ」
「ええ、わかっています。その低級紙の元値が銅貨二十枚なものもわかっています」

「う、そりやお客様、なかなかの目利きで……」

ちなみに一枚ではなく束での値段だ。

錬金貴族は紙も作るし、購入することもある。研究用に使用するからだ。よく父が商人とやり合っているのを見ていたので、適正価格は町民よりわかっているつもりだ。

ジト目になったミルに、ほろ苦い顔の店主。

「店主さん、今は市場にお店がたくさん来てますよね。こんなときに噂がたつたら、あつという間に広まりますよ。海を渡った先まで」

「……銀貨十六枚でお売ります。これ以上は輸送費もあつて赤字になっちゃいます。勘弁してください」

駄目押しとばかりに続けた言葉に、店主はがっかりした。

そんなものだろうと手を打った。

所持金が足りてよかった、と思いながら店主が枚数を数えるのを待つことになる。ミルは相変わらず自分を見ている少年を、そろそろと見た。

睨んでいたのが戸惑うものに変わっている。

首をかしげると、少年は意を決したように話しかけてきた。

「アンタ字が書けるのか？」

「はい。ええと……どうして代筆屋に行かないのですか」

「店の兄ちゃんが喧嘩に巻き込まれて、腕を折っちゃったんだ。俺、村に仕送りしてるから遅れると困るんだよ。ちゃんと代金は持つてる。頼むよ！　このとーり！」

それは大変だ。

両手を差し出したミルは、少年から便箋を貰うと店主に問いかけた。

「数え終わるまでペンを借りてもいいですか？」

「ええいいですよ。お客様ですしね」

気まずい顔をした店主はチラリと少年を見た。店主も代筆屋が怪我をしたのは知らなかったのだろう。

「お名前と内容を教えてください」

「え、あ。やってくれんのか？　ありがとうな！」

実家にいたときは、読み書きができない領民の変わりに代筆をしていたので慣れたものだ。

「シエツドだ。俺は元気にやってるからよろしくって書いてくれ」

「それだけですか？　送る金額を書いたほうがいいですよ」

「二十文字以上だと銅貨十枚上乗せされるだろ？」

「そんな話は聞いたことがありませんが……」

領地によつて違ふこともある。

思わず店主を見ると、彼も顔をしかめていた。手を止めて長い髭をなでつけている。

「坊主、代筆屋の誰に頼んでた」

「マグリットつてやつ。赤い髪の男だよ。まさか騙してたつて言うのか？ でもいつも料金まけてくれてたんだぞ」

「そいつは鼻屑すれば値段をまけるつていつてたんじゃないか？」

「お、おう」

嫌なものを聞いちまった、と呟いた店主は続ける。

「代筆屋の料金は文字数じゃなくて、枚数だと商業ギルドで決まってるんだ。凝った手紙や詩の引用なんか付けるときに上乘せされてく。坊主は騙されたな」

「なんだって！ あの野郎！」

「待て、お前ら捕まえろ！」

あつという間に警備の男達に捕まったシェツドが「何すんだよ！」と怒鳴る。

「ああもう、今日は商売にならない。……店の扉を閉めて臨時休業の札を下げてくれ。おい！ ちょっと来て紙の枚数を数えてくれないか」

「はあい。なあにアンタ。泥棒？」

「違う違う、せっかち坊主だ。大事な話をするから、誰にも言うんじゃ

ないぞ」

「はいはい」

奥から出てきた店主の奥さんは紙の枚数を数え始めた。

向き直った店主はシェツドを見る。

「証拠もないのに店に殴り込んでみる。お前のほうが兵士にとつ捕まるだけだ」

「でもあいつは嘘をついてたんだぞ。俺は聞いたんだ！」

「お前が言っただけじゃ証明にならないんだ。わかるか？」

「じゃあどうすりゃいいんだ。泣き寝入りしろってか!？」

「今の話を領地の兵士に話すんだ。証拠が無いから捕まえられないが、勉強代と思って我慢しろ。じゃないと坊主がクレーマーだと告げ口され

ちまうぞ。毎日迷宮ばつか入って稼いでるわけじゃないだろう？」

「それは、そうだけだよ……」

嫌な客だと周知されると、ジェットの仕事に差し障りがあるかもしれない。

「そうだろう、そうだろう。こんな話があったとギルドに話しといてやるから」

「わかったよ……」

落ち込んだシェットの肩を店主が叩く。

「お客さん、よかったら仕送りの手順っつーもんを坊主に教えてやってください。あと、兵士と一緒に話しちゃくれませんかね」

「頼むよ！」

「わかりました。それでは値段を書きましよう」

中にいくら入れたのか書いておかないと、抜かれても気付かない場合がある。いろいろとレクチャーしながら手紙を書き終えると、便箋に配達先の住所を記載する。これを常時街道を行き来している商人か、専用の配達人を雇って配達する。

「凄え、全然違う。代筆者の名前も書くなんて知らなかった」

「そこは場合によって変わります。ただ、お金を送ると何かあった場合、証言が必要になります。きちんと書いてくれる人を見つけたほうがいいと思います」

「今回の事もあるしな。勉強になったよ」

「こつちも終わりましたよ。それで交渉の時の話ですが……」

揉み手している店主に苦笑しながら頷く。

「わかってます。親切な店主さんのお店ですよね」

というわけで値切る前にあったやり取りは闇へ葬られることとなった。これで店主も安心して眠れるだろう。

「ええ、そうですとも！ またのご来店をお待ちしていますよ」

「なんだよ。そういうことかよ……」

まあまあ、と言いながらミルは代金を払い、マジックバッグに商品を入れる。シエツドの背中を押して店を出た。

シエツドがいつもお願いしている配達人に手紙と配達料金を渡すと、二人は兵士の詰め所へ向かった。

「どんくさいな。もつとするする行かないと下の階層で苦勞するぞ」

「ううっ。すみません」

人に当たってよろけているミルの手を引っ張ったシエッドは「魔法使いだもんな。しかたないか」と勝手に納得したようだった。

「ほら、あそこが詰め所」

「落とし物を見つけたら、あそこに届けばいいのですね」

「……いいところのお嬢さんなのか？」

今更な質問をしてくるが、なぜ落とし物の話でそうなったのだろうか
と首をかしげた。聞く前に兵士が声をかけてくる。

「何かありましたか」

「ズリエルさん！ 門番のお仕事はいいのですか？」

「欠員の補充です。市場が終われば元の配置へ戻ります」

関所からギルドへ案内してくれた兵士は、相変わらさずキリツとした表情で立っていた。兵士もちよこちよこ配置が換わって大変な仕事だなと思っている、シエツドが代筆屋に騙されたことを話す。

側面の獣耳がピクリと動く。

「申し訳ありませんが調書を取ります。中へどうぞ」

「おうよ！」

まるで挑むかのように腕まくりをしたシエツドに続く。

中には別の兵士が一人いて、領民が落とした荷物の届け出を書いているところだった。スリもいるし、基本的に落とし物は返ってこない。しかし犯人が捕まるかもしれないので、大事な物を落とした人は届け出ることが多かった。

ズリエルはいくつか質問を挟みながら調書を取っていく。直ぐにできあがり、二人は詰め所の前で別れることになった。

「今日はありがとうな！」

「いえ、お役に立ててよかったです」

サムズアップしたシェッドは駆け足で帰っていった。

「……それにしても、都会って怖いです」

ミルも自分の宿へ戻り、ドーマの強面に出迎えられた。

お風呂から上がったミルは洗濯物を部屋に干して、買ってきたばかりの紙を机に置く。

インクと羽根ペンを準備して、光魔法の初級編を開いた。

「光の三原則から魔力の循環について——ここは普通の魔道書と一緒にすね」

順番に読んでいって、知っているところは流し読みをする。半分は既に読んだことのある内容だった。終盤には魔法の構成と呪文が記載されている。《ライト光》の魔法もあった。

ざっと見たが初級編はすぐにでも写本できる内容だ。

中級編は光魔法が通じるモンスターの種類が載っていて、呪文も記載されていた。記入した人は所々違うようで、ページの端に名前が書いてあった。

もしかしなくても、この本は全て手書だ。

ヘテムルの名前を見つけたし、モンスターの出現迷宮は多岐にわたる。

滅んだ魔王が作ったとされる闇モンスターの迷宮もあった。

「魔王がいれば……いい、いえ駄目です。そんなこと考えちゃ」

首を振って考えを入れ替える。平和な世界はいいことなのだ。

上級編も捲ってみたが内容は中級編と変わらない。ただし、項目が増えている。

「光魔法と付与魔法の合成魔法？」

『合成魔法——光・付与魔法。光^{こうげき}撃系統。光魔法の攻撃系統の魔法』

「攻撃魔法が！ あ、あああああり、ありました!!」

思わず魂の叫びを上げてしまう。

「えっ、闇属性以外にも効く!？」

聖、闇、火、水、土、風、無、闘気、時空魔法など、属性分類は

増え続けている。未だ見つかっていない属性があると言われる昨今の魔法理論。合成魔法はよく研究されている分野だ。

しかし光魔法の合成魔法は聞いたこともない。

目を輝かせたミルは、魔法を練習することにした。

「ええと呪文を唱えて、できあがった障壁の形を変える……

《ウオーレル・ルクス光障壁》！」

光系統の合成魔法は全部呪文にルクスが付く。

足下に魔方陣が浮き光の壁が現れたが、障壁が光っているだけに見える。首をかしげる。

「これ、普通の《ウオーレル障壁》の形を変えただけみたいですよ」

ポーンラビッツ角持つ兎は勝手に自滅してしまっただが、これだけなら《ウオーレル障壁》だけで

もできそうだ。

検証は明日にしようと思団へ潜る。しかし興奮でなかなか眠れず、夢の中に入ったのは深夜を回ってからだだった。

朝、きつちり顔を洗ったミルは顔を引き締め、一階層へ向かう。早速現れた角持つ兎は、しかしミルと数秒見つめ合ったあと逃げていった。

「しやがまないと駄目なのでしょいか」

何か角持つ兎にはこだわりがあるのだろう。冷や汗を流す。

角持つ兎と戦闘できたのは一時間後。最初に形を変形させた《障壁》

で試したが、初戦と同じ結果となった。生き残った貫禄のある角持つ兎。

《光障壁》に変えて待ち構えると、当たった途端目を回して気絶した。

「もしかして触ったら《目眩まし》^{フラッシュユ}の効果が出る……ぽいですね」

《目眩まし》^{フラッシュユ}は強烈な光を放つ魔法だ。目眩ましや気絶をさせる場合もある。闇属性のモンスターにしき気絶効果が出ないのだが、合成魔法になると別属性のモンスターにも効くようだ。

「これならパーティに入っても大丈夫かもっ」

未だ手つかずの上級魔法書もある。

ミルは目を輝かせた。

日中は迷宮に潜って魔法の練習と依頼をこなし、夜は写本をすることにした。薬草採集はあまりお金にならなかった。代わりに臨時のバイトに入った。今はどこも人手が足りないらしい。初めての仕事もあったが、

ミルは自分にできることを探しに来た。何事も挑戦である。

最初は貯金を切り崩していたが、働き始めてから生活ができるようになってきた。ギルドはミルにできない仕事を進めたりしない。スプラは見極めが上手かった。

余剰金は装備や情報収集にあてるつもりで貯めている。

二週間ほど練習していると《障壁^{ウォール}》を別の形に変えられるようになってきた。強度も柔らかい物から堅い物、粘り気を出す方法も考案した。魔力量や感覚の掴み方が難しいが、実用できれば下の階層に進むことができるだろう。

「いけない、もう夕方です」

迷宮内は景色が変わらないので時間経過がわかりにくい。

時計を見て慌てて階層を出た。

換金を済ませ早歩きで出口へ進んでいると、横から飛び出してきた何かにぶつかり転んでしまった。

「どこ見て歩いてんのよ！」

驚いて顔を上げると、きつく睨まれていた。猫人族の女性で、滑らかな茶色の毛並み。金色の目をしていて、冒険者の装いをしている。腰には短剣、露出の多い服装は斥候役だからだろうか。

「ぶつかってきたのに謝らないわけ？　ていうかアンタもしかして、うちのリーダーに粉かけてた女？」

「えっ」

全く身に覚えのない事に目を丸くする。

目を釣り上げた猫人族の女性は「あーやだやだ」と大袈裟な動作で手を振った。ますます声が大きくなる。

「魔法使いにもなれない付与魔法使いが、男たらしこんでんじゃねーよ。媚びる暇があったら魔法の一つで覚えろってーの。阿婆擦れが！」

「きやあ！」

「何をしている！」

鋭い舌打ちが聞こえ、猫人族の女性はさっと人混みに紛れて逃げた。ミルは尻尾で殴られた顔を押さえ涙ぐみながら立ち上がる。

「大丈夫ですか」

駆けつけてきたのはズリエルだった。怪我を確認して顔をしかめ、ギルドに併設されている医務室に連れて行く。医師に診察され、塗り薬を

処分された。

「先ほどの者は探し出し、しかるべき処置をとります。それまでお待ちください」

「処置ですか……？」

「ランク降格や罰金のことです。悪質な場合はギルド証末梢後、領外へ追放します」

それは厳しいのではないか。

顔を曇らせると、ズリエルは首を振る。

「ユグド領の決定には他貴族であろうと従っていただきます。領地に入る際に契約書をお書きになったのを覚えておいでですね」

「はい、あの……わかりました」

ピンと立った耳を見てミルはガクガクと頷く。

ズリエルの鋭い眼光が和らぎ、いつの間にか詰めていた息を吐く。

「驚かせて申し訳ありません」

「いいのです。それより助けていただいて、ありがとうございます」

「お仕事に戻ってください」

「そう致します。本日の探索が終わりでしたら、この後、お時間をいただけますか」

「調書ですか？」

「それもありますが、別件です」

首をかしげると「サンレガシ様を探しておりました」と言われ、ぽかんと口を開けた。

所変わって詰め所。

二週間ほど前に会ったシエツドという少年を騙っていた代筆屋が捕まったのだという。マグリットという名前の男だったはずだ。

以前から手紙が届かない、仕送りの金が抜かれているという被害が報告されていたので犯人を捜していたそうさ。

そこでマグリットに罫を張ったのだという。シエツドにもう一度騙されたふりをさせて、偽の手紙を送らせたところ、配達人と結託していることがわかった。

「奴らは物知らずな人物を狙い、犯行に及んでいました」

シエツドは兵士を連れて一時帰宅をし、家族に仕送りが来ているか確

認めたという。一度も来ていなかったらしく、とても怒ったそうだ。

他にも余罪がありそうだったので泳がせたところ、計十三人の配達人が捕まった。被害総額はまだだが、冒険者は相当な額を稼ぐので被害は大きいだろう。

たった二週間でよく調べたものだと感心していると、どこか言いにくそうにズリエルが続けた。

「サンレガシ様がお書きになった手紙の中身も盗まれ、捨てられています。ご記入なさったときのお話を証言として使用させていただきます。」

「もちろんかまいません。裁判所へ出頭すればいいでしょうか？」

「いえ、調書を使いません。……今回の件を重く見た御領主様が、内々に監査をするように申しつけられました。信用できる者の査定が終わるま

で、失礼ですが、代筆の仕事を「ご依頼させていただきたいのです」

これはギルドを通しての依頼だ。昼からギルドの受付近くの部屋を開けて交代でするらしい。他にも何人かに連絡を取って募集を募っているという。ミルは週に二回出てほしいと言われた。

査定は一月ほどかかるようなので臨時バイトのようだ。

だがパーティ募集に入れたら、迷惑をかけてしまうかもしれない。

（すぐに入れないかもしれないし、ここは頑張ってみよう）

「わかりました！ やらせていただきます」

「ありがとうございます。では、明日の昼過ぎからお願いたします。

日程はそちらで調整いただければと」

ほっとズリエルが息を吐いたのは、ミルが貴族だとわかっているから

だろう。平民が貴族にお願いをするのは情動的に辛い。少しだけ同情心が湧く。

そういうことで、週に二日の代筆仕事が決まったのだった。

忙しい日々が続き、ミルは溜め息を吐きながら枕に顔を埋める。

「うう……今日もパーティーに入れてもらえませんでした」

ギルドで猫人族の冒険者に絡まれたあと、どこからかミルの悪い噂が流れたようで、どのパーティー募集も蹴られてしまう。入れてもらえそうだと思えば、いくらで相手をしてくれるのか聞かれる始末。娼婦ではないので、当然断った。

付与魔法使いというハンデもあるが近頃身の危険を感じる。

「どうしてこんな事に……」

グズグズ泣きたい気分だが、一人でもお金を稼がなければ。

「できることをする！ 今日こそ次の階層へ行かなくちゃ」

思い切り頬を叩くと、じんとした痛みが心に染みるようだった。

少しでも強くなれば別のパーティに入れてもらえるかもしれない。今はパーティを組めないが、できる最善を尽くすのだ。

着替えると迷宮へ向かった。

ウズル迷宮の二階層へ続く黒門は、既に見つけてある。

黒門とは迷宮にある不思議な入り口のことだ。次の階層へ繋がっている。上層とは全く別の異空間へ繋がっていることや、時空間を飛び越える物もあると言う。外見は渦を巻く雲のようなもやのを岩が囲んでいる

だけで、扉はないが。昔の人がそう呼んだのが始まりらしい。

黒門に触れると表面は温度の無い水のようになっており、不思議な感触がする。

ミルはとうとう、二階層へ続く黒門を通り抜けた。

空気が変わった。

二階層は一階層とほぼ同じと聞いている。違うのは「階層主」^{アイトレータ}と呼ばれるモンスターが出ることだ。

「階層主」^{アイトレータ}は初見殺しと言われることもある、要注意モンスターだ。

迷宮には必ず「階層主」^{アイトレータ}が出るのだが、種族も特徴も全く違う。大きな個体が多く、同じモンスターが出ることも、変わる場合もある。なぜ発

生するのか誰も知らない不思議なモンスターだ。迷宮の不思議の一つに数えられている。

この二階層では、倒されると毎回種類が変わると聞いている。

二階層の適性レベルは五なので難易度は低い。柔らかな起伏のある草原を降りてモンスターを探し始めた。

《ウォール・ルクス光障壁》でポーンラビツト角持つ兎を倒すと、周囲を見回してアイテムボックスの中に入れる。

「二階層ってモンスターが多いのでしょうか」

ポーンラビツト角持つ兎だけで六回も出くわしている。いつもなら三度くらいなのに。汗を拭いながら青ポーションを飲むと魔力が回復する。

そろそろ帰らないと解体作業が夕方までに終わらなくなりそうだ。

「なんだか声が聞こえてきますが……何でしょう」

騒がしいと思ったとき、地面が断続的に揺れ始めた。

杖を構えた瞬間、逃げ出す冒険者達を見た。

「アイトレクター階層主」が出たぞー!!」

まるで角持ポーンラビットつ兎を太らせて大きくしたようなモンスターだ。二階層の

「アイトレクター階層主」は兎のモンスターだ。角持ポーンラビットつ兎と違って二足歩行をしている。

危険を知らせる声に、周囲にいた冒険者が一斉に黒門へ走り出す。ミ

ルもその後が続こうとしたとき、悲鳴が聞こえた。

「誰か助けて!」

少女が蹲うずくまっている。その下に庇われた少年は動かず、頭から血を流

していた。

ミルはとつさに呪文を唱える。

「《光障壁》！」
ウオール・ルクス

「ピギユア！」

二人の子供を覆った障壁は、「階層主」の一撃を受けて砕けた。

「階層主」は弾けた光に驚き、その赤い目で左右を見回した。

「今のうちに逃げてください！」

「で、でも弟がっ」

「《障壁》！」
ウオール

少女が喋った途端、「階層主」は足下に目を向けた。振り上げた手が当たる前に作った障壁が二人を守る。ミルは緑のポーションを投げると杖

を構えた。

「ライト光》！——目を瞑って！」

杖先に集めた光球を、杖を振って投げる。

「これはまだ苦手だけど——フラッシュ目眩》！」

「アイトレータ階層主」の眼前で光球が弾けた。目も眩むような閃光に、高い声を上げて前足を振り回す。少女は弟にポジションを飲ませ、背中に担ぐと引きずって門へ歩き始めた。

他の冒険者は逃げている。

ミルは暴れる「アイトレータ階層主」を閉じ込めるように三つの障壁を張る。

（ウォール・ルクス光障壁》はあまり効果がなかった。どこかで巻いて、黒門へ逃げなくちや）

それにはまず姉弟を逃がさなければならぬ。障壁は今にも割れそうで、何度もかけ直すのが追いつかない。これでは魔力がつかえてしまう。

「階層主」はとうとう痺れを切らし、一枚の障壁を集中的に壊し始めた。前足を地面につくと四足歩行で突進する。

とつさに《障壁》ウォールを堅くするが、ガラスのように砕け散った。

ミルは跳ね飛ばされた。体を打ち付け、頭がクラクラする。

「階層主」アイトレータは地面を削るように勢いを殺しながら回り、返ってくる。

「《光障壁》！」ウォール・ルクス

障壁に突っこむ「階層主」アイトレータは、ぐにやりと伸びた障壁に包まれ後方に吹き飛ばす。

堅い障壁は勢いをつけた「階層主」アイトレータの突進を防げない。ならばと柔ら

かくした障壁は破れず引き延ばされ、「階層主」^{アイトレータ}の攻撃を回避できた。

「これならっ！」

「階層主」^{アイトレータ}を避けられるかもしれない。

そう思ったが、前足を振った「階層主」^{アイトレータ}の指先に長い爪が現れる。とつさに木の陰に転がった刹那、柔らかな障壁は切り刻まれた。

柔らかい障壁は鋭い一撃に負けたのだ。

（後ろは下がれない。まだ二人とも近くにいます）

退路を防がれたミルは杖を振る。

「《目眩まし》^{フラッシュユ}！」

しかし、前足で顔をガードし防がれてしまう。

学習能力が高い。

逃げるべきか——迷った一瞬でミルは叩き飛ばされた。固い地面にぶつかり、木の幹に背中から当たる。マジックバッグの蓋が開き、中身が周囲に広がった。

息ができず痛みをやり過ぎるように固まったミルの耳に、悲鳴が聞こえてくる。

短剣を抜いた少女が背中に弟を庇っている。弟は意識が戻らず倒れたままだ。

（今助けられるのは私だけです。しっかりして、立つのよ）

散乱した荷物の中にポーションがあった。痛む腕を伸ばして中身を飲むと、少しだけ引いていく。

杖を頼りに立ち上がりとしても、『ラビッドロッド兔の魔法杖』は折れていた。杖の

補助は受けられない。

這うように進もうとしたとき、膝で何かを踏み、滑って顔面から転がる。慌てて顔を上げると、ヘテムルから貰った特上級の魔法書だった。

ちようど開いていたページに目がとまる。

「杖を、使わない魔法……？」

そんなうまい話があるわけない。

だけれど今は、どんな可能性にも縋りたかった。

ミルは本を手に取ると痛みを我慢して大声で叫んだ。

「△大いなる光よ。我が魂は誇り。我が声に果ては無く——」

体に光が走り、魔方陣が描かれていく。

「——この体が盾ならば、我が運命に勝利は要らず。黄金の鐘よ鳴れ。

その音は光^{ルイメン}！」

十本の指先に光球が点り、教えられるでもなく両手を振った。糸のよ
うに細い光が飛び出し、「階層主^{アイトレータ}」の体に巻き付いた。

「階層主^{アイトレータ}」は光を振り払うように暴れるがびくともしない。どころか
足に巻き付いた光のせいで転がってしまう。

「逃げて！」

信じられないものを見たかのように口を開けていた少女は、短剣を放
り出すと弟を背負った。

暴れる「階層主^{アイトレータ}」に腕を持って行かれそうになりながら、ミルは木の
幹を回り、糸を巻き付けると座りこむ。暴れる「階層主^{アイトレータ}」相手に、ミル
の力だけでは抑えきれない。

頭が重くなり、貧血を起こしたかのように視界が白く点滅する。魔力が枯渇しようとしているのだ。しかし両手は塞がり青ポーションも飲めない。

膝から力が抜け、座りこむように倒れる。

「頑張ったね」

意識が途切れる直前、大きな影がミルを守るように現れた。

十

空は快晴。風もなく鳥の声もしない。

昼食を終え、ゆっくりと紅茶を楽しんでいたヘテムルは、聞こえてき

た鐘の音に思わず笑ってしまった。

「おお？ 鐘が鳴ってるぞ？ 誰の所だ？」

「ワシじゃねえわい」

「俺もちげえな」

「うちの一番弟子かもしれん」

「馬鹿を言え。お前んところの弟子は四歳じゃろ」

「特上級魔法使いの誕生じゃあ」

「どこの鐘だ？」

周囲で同じように食卓を囲んでいた魔法使い達が顔を見合わせる。かと思えば冗談を言い合った。

「お師匠様ー」

そのとき、小さな男の子が三角帽子を落としながら駆け込んでくる。

おやおやと顔を向けた魔法使い達。

「お伝えします！ 鳴ったのは黄金の鐘でした！」

はきはきした声に一瞬喧騒が消えた。魔法使い達は「ほう！」と歓声を上げる。

「ヘテムル！ おい、お前いつ弟子を取ったんだ？」

「お前ん所の鐘が鳴る条件は何じゃったつけの？」

「ワシ、弟子はとつとらん。条件も教えん」

「ケチー」

「ケチ爺じゃな」

「この爺が！」

「お前らも爺じゃろ」

負けないくらい大きな声で笑ったヘテムルは立ち上がると、カップを窓の外に掲げる。

「ああ、いい子が現れた。光の加護に乾杯じゃー」

十

目を開けると体が重かった。

かすんだ視界のまま横を見ると、声をかけられる。

「起きた？」

のぞき込んでくるのは心臓に悪い美青年。

赤い目を見てみると記憶が蘇ってくる。

「もしかしてシャリオスさん？　ここは……」

「そうだよー。よかった、忘れられていたらどうしようかと思った。久しぶりだね。ここはミルちゃん泊まってる宿の別室だよ」

最初はギルドの医務室にいたが、異常がないのでベッドを開けてほしいと追い出されたそうだ。申し訳ない。

ギルドに泊まっている宿を聞いて、わざわざ運んでくれたという。

「部屋に入れなくてドーマが驚いてたよ」

「ああ！　すみません……」

「魔導具だよね？」

ソワソワするシャリオスに微笑み、首に提げた『あなただけの部屋』

を見せる。

「これです。私が許可した人ではないと入れなくなります。ドーマさんに言うのを忘れていました……」

「見たことないやつ！」

「兄が私に作ってくれたものですので」

「えっ!? お兄さん魔導具作る職の人? 名前なんて言うの?」

「まだ修行中なので無名ですよ」

なんとなく家名を知られたくなくて誤魔化す。

首をかしげたが、シャリオスは足下の荷物を持ち上げる。

「散らばってた荷物を拾っておいたんだけど、中身確認してくれる?」

「そういえば、近くに兄妹がいたと思うのですが、見ましたか?」

彼女達は無事なのだろうか。死んでいないといいのだが。

「見なかったけど、誰か死んだ話は聞いてないな」

「よ、よかったです」

ぐーっと体がベッドに沈む。

一気にだらけた表情になったミルに微笑み、シヤリオスは「具合はどう？」と尋ねる。

「すっかり元気です」

節々が痛いのは筋肉痛だろう。

「杖だけど、真ん中から折れたでしょう？ 見せたけど直せないって。

中の魔力伝導がおかしくなったみたい」

「新しいのが必要だね」と言われ落ちこむ。作ってくれた杖は今まで

ミルの生活を支えていたし、故郷を思い出す大切な道具だった。

「具合よくなったのなら部屋に戻らない？ 荷物持ってあげる」

『あなただけの部屋』使うところを見たいのですね」

「へへへ」

魔導具に目が無い吸血鬼が誤魔化し笑いをする。

何が楽しいのか、シャリオスは部屋を開けていると扉の鍵を入念に調べて喜んだ。

曰く「ここにある鍵は二重ロックになってるんだね！

『あなただけの部屋』が最後って言うところも条件の一つでうんぬんか
んぬん」と早口で言われて最後の方は聞き取れなかった。恩人が喜んで
いるのだからいいや。

「階層主^{アイトレータ}」には討伐報酬があるらしく、六対四で受け取った。

てつきり止めを刺したシヤリオスが全額もらうものだと思っただが、足止めをしたことが重要なのだという。なんでも兎型の「階層主^{アイトレータ}」は初心者殺しと言われるほど凶悪で、毎回死人を出しているそうなのだ。

他の人のためにもお金を受け取るように諭された。

お金の入った袋を受け取ったミルは、後で銀行に入れようとほくほく顔をしたのだが、シヤリオスに止められる。

「杖を買うの忘れてない？ 下の階層に降りるなら装備も新調しないと。今のじゃ一撃であの世だし」

「あの世……」

「ミルちゃんの屍は、永遠に迷宮に横たわるのであった……」

「ひい」

「悲しい結末は避けよう」

と言うことで、厳かな顔したシャリオスがいい店を知っているというので、明日出かけることになった。

ミルは大金を見ながらしよっぱい顔をした。

翌朝、筋肉痛が酷くなつて、へっぴり腰のままドーマに『あなただけの部屋』のことを話すと「次から気いつけなあ」と凄みのある顔でサンドイッチを出された。

置く度に尻が数センチ浮くものにも馴れた今日この頃。

シャリオスが宿にやってきた。

相変わらず黒い鎧に全身を包んでいる。

「そう言えば、昼間から出歩いて大丈夫なのですか？」

「ふっふっふー！ 完全武装してるから大丈夫」

小さな隙間から入ってくる光は《纏う闇》ダークネスで弾いていると言う。

「熱くないのですか？」

「耐熱装備だから多少は平気。行こう？」

手招かれてついて行くことしばし。大通りから外れた一軒家に招かれた。あばら屋にしか見えない。

中へ入ると煙管から口を離し、ぷかりと丸い煙を吐く店番がいた。すり切れた繋ぎ服の男は顔の半分が火傷で爛れている。瞼が半分開かないのか、皮肉そうな表情に見える。顔の側面には垂れ耳が付いていた。犬

人族だ。

店内の壁に掛けられている盾には埃が積もり、無造作に置かれている剣もそうだ。テーブルの下には防具が適当に積まれ、全体的に薄汚い。

「なんだあ、子育てでも始めたか」

「違うよ。今日はお客さんを紹介しようと思って。ミルちゃん、このおじちゃんは装備屋の店長。いつもお客さんが来ないように頑張ってるんだ」

「テメエみたいな面倒な客を追っ払ってんだ。知ってんなら連れてくんなじゃねえよ」

「こんなこと言ってるけど照れてるだけだから。おじちゃん、この子は魔法使いなんだ。杖と装備を一式くれる？」

「お前って自由だよなあ。聞いちゃいねえ」

手招きされたミルはがっしりと両頬をつかまれてビクツとする。

「魔法使いだあ？ こいつあ付与魔法使いじゃねえか」

「そうだったの？ ごめん、そう言えば聞いてなかった」

「せっかち野郎め。おら嬢ちゃん、ギルド証出しな」

「ひい」

半目になった店主にギルド証を出すと「ふーん」と眉を上げる。片方しかない眉毛を見ていると興味なさそうに返される。

「おじさんは鑑定魔法持ちなのですね」

「店主って呼べよ、どいつもよお。攻撃魔法は使えんのか？」

「ええと、それが光属性で……」

「そうかい。なら補助メイン武器か」

「攻撃もできますよ！ 光魔法にだって攻撃魔法がですね」

「ほーん」

全然信じていない様子だ。

後ろの箱を漁って杖を出してくる。白い木の長杖だ。

「カンデラ木を削って作った杖だ。時空魔法とも相性がいい。店でお前さんにあう杖はこれしかねえよ。銀貨二十三枚寄越せ」

この領地では料金をせしめるように言うのが普通なのか。

ミルが生唾を飲んでみるとポイと杖を投げ寄越される。

「思ったより……軽いです」

「そりゃカンデラ木だからな。光属性持ちにや軽く感じるだろうよ」

「へー！ 僕が持ってみてもいい？ 重っ」

受け取ったシャリオスの腰がずん、と落ちる。ミルが触ると軽くなつたように不思議がつていた。

「おじさんも光属性持ちなのですか？」

「馬鹿いえ」

ぐっと腕を曲げると筋肉が盛り上がる。背が高く体格がいいが、いくら何でも腕が三倍に盛り上がるのは詐欺だ。目を丸くしたミルにニヤニヤ笑いながら反対の腕も曲げると、ムキンと筋肉が盛り上がる。

「光属性持ちはあんまりいないからな。そいつは手慰みに作ったようなもんだ。カンデラ木は、木自体が光属性だからな。あと気難しいから持つ奴を選ぶ」

「おじちゃんみたいな杖なんだね」

「てめえ出禁にすんぞ」

「はいはい、防具は」

「ちっ！ 金は置いて行け！」

強盗みたいな事を言いながら再び投げ寄越されたのは、長い皮ブーツに尖り帽子。足下まであるローブとスカート、手袋だった。全て白で統一され、銀の刺繍がしてあった。

「羽衣装備一式だ。光魔法の効果アップ。防御力も相当ある。破れにくいし防水だ。雨の中も歩けるぞ」

「おじちゃんが作ったの？ デザイン可愛いね」

「先代だボケエ」

ミルは着てみると試着室に追いやられた。試着室というか部屋の隅に布が引っかけられた場所みただったが。

なんだか乙女チックな衣装だ。しかも裾が余ってしまふ。

少し恥ずかしく思いながら出ると、店主は半目のまま頷き。シャリオスは無言でニコニコした。なぜか失礼なことを考えている気がする。

「そのうち伸びるから大丈夫だよ」

「なにがですか」

「胸と足と裾は詰めとくぜ。身長が伸びたら直してやるから来い。全部で金貨三枚と銀貨五十二枚。銅貨九十二枚はまけといてやる」

残酷な胸部への対応を言いながら、店主は靴の履き口を一回折り込んだ。そしてもう一度折り込んだ。

「毎日ミルク飲めよ」

残酷すぎる店主はミルの頭をごしごしと撫でた。シャリオスは「成長期だから大丈夫」と言いつつ、一瞬悲しげな表情をした。

ぶかぶか装備は明日までにサイズを合わせてくれると言うのでお任せした。銅貨九十枚取られた。実質銅貨二枚のお値引きでは、と思ったのは正しいだろう。

そうして外に出ると、重い財布が軽くなり「階層主」^{アートレータ}の報酬は吹き飛んだ。装備を受け取ったら探索を頑張らねば。

「よかったね。あれきつと一生物の装備だよ。僕は金貨二百四十枚取られたし」

「金貨二百四十枚……!!」

吸血鬼の専用装備はいちいちオーダーメイドで高いのだと、シャリオスは世知辛い顔をする。ミルは白目を剥いた。

そんなにお金があったら、毎日お風呂に花を浮かべられる。少しお高めの石鹸をつけてもおつりが来てしまおうし、宿暮らしを止めて庭付きの家だって買えそうだ。

金貨二百四十枚を着ているシャリオスの経済力に戦ってしまう。貴族と言えど錬金で食べているミルの実家は、開発費でいつもカツカツだ。

「ところで、どうして隠れるのですか？」

今度は道具屋へ向かっているのだが、シャリオスは人の気配を感じる。と物陰や影に潜って隠れる。しかも、ひと気のない道を選んでいた。

「それは……」

「それは？」

「僕が御領主様の持ち宿に泊まってるのは知ってるよね？　いろいろあるんだよ」

「そうなのですか」

それだけではなさそうだが、言いたくないのだろう。

「あ、道具屋が見えたよ。転がっても蓋が開かないウエストポーチを買おう。そしたらお昼ご飯をミルちゃんの宿で取ろうか。今までの冒険を教えてね」

あからさまに話題を逸らしたシャリオスに引きずられながら、看板をくぐった。

「これがいいと思うな！」と進められるままウエストポーチを購入した。内側に巾着のマジックバッグを付ける予定だ。

二人は早々にドーマの宿へ引き返す。

装備を手に入れたが、これから探索を頑張らないとカツカツである。

店の一番奥。薄暗い店内の端っこで二人は食事を取っていた。ミルが光を屈折させ、シャリオスが出した蝋燭の火が、唯一の灯りだ。

彼はドーマの作る料理をもりもりと平らげ、おかわりをする。

本日はカツ丼だ。甘いタレが美味しく、お米もほかほか。突然大量の材料が採れたらしく、しばらく米料理になるらしい。

「それじゃ昨日が初の二階層進出だったんだ。いきなり「階層主」アイトレータに遭うなんて大変だったね」

「その節はありがとうございます。シヤリオスさんは帰宅途中だったのですか？」

「そうだよ。ミルちゃんの声が聞こえたから、もしかしてと思って。格好よかったなあ。大いなる光よーって」

「ギャ！ 止めてくださいよ、恥ずかしい……」

薄暗くてわかりにくいのが、にやにやされている気がする。

「光魔法って呪文が長いんだね」

「あれは何か……特別？ な魔法みたいです」

特上級の魔法書を渡すと、捲ったシヤリオスは首をかしげた。

「何が書いてあるの？ 真っ白だけど」

テーブルの上に見開きで置かれた本には、びっしりと呪文構成が書か

れている。二人はお互いに首をかしげ、カツ井で膨らませた頬を動かす。

「もしかしてマジックワードで書かれてるのかな？ もぐもぐ」

「何でしょうか、マジックワードって。もぐ」

「魔力で書かれた文字のこと。魔導具でもよく使われる手法で、条件を満たさないと見えない仕組みなんだって。もぐもぐ。僕も魔導具分解して中身を調べてみるんだけど、全然読めないんだよね。マジックワードがあるのはわかるんだけど、ごくん。おかわりくださいーい！」

「よく噛め」

光属性がないと駄目なのかな、とシャリオスがぼやく。

そんな条件があるならなぜ読めたのだらう。思い当たる節はない。

考えながら浮いた尻の位置を直すと、井の中を見たシャリオスが「そ

れにしても」と続ける。

「体重増やしたほうがいいよ。それじゃモンスターにぶつかっただけで飛んでく」

やや心配そうな表情に怪しげな色気を感じる。口の周りにべったり付いたソースと、顔面ほどもあるどんぶりを持っていなければ直視できなかっただろう。

これで普通になっているだけとは、女の子として負けた気がする。ついでにシャリオスの胸部とドーマ、そして自らの胸元を見比べてがっかりする。

足の長さも色気もシャリオスに負け、胸の大きさはドーマの胸筋にも及ばないささやかさ。

やけくそのようにミルクを頼むと一気飲みした。

お風呂で自分の胸を揉んだミルは溜め息を吐く。

悲しい、毎日ミルクを飲もうと決意する。

それにしても、あの魔法は何だったのだろうか。

特上級の魔法書には他に呪文があった。シャリオスに言われて調べてみたが、偶然開いたページ以外、理解できない。文字が書いてあるのはわかるが、どうしても読めないのだ。

認識阻害魔法ではないかとシャリオスが言った。条件を整えば読めるのではないかと。

まるで奇跡のようなタイミングで現れた呪文。

あれからいくら試しても発動しない、不思議な魔法。

条件とはなんだろうか。

「大いなる光よ。我が魂は誇り。我が声に果ては無く。この体が盾なら

ば、我が運命に勝利は要らず。黄金の鐘よ鳴れ。その音は光ルイメン」

指先に光が点り、霧散した。

「条件ですかあ」

ぶくぶくとお湯に沈みながら考えるが、答えは出なかった。

+

ウズル迷宮二階層。

「階層主」^{アイトレータ}は倒したばかりなので、今は一階層と同じ難易度になっている。
いる。

新しい装備を身に纏ったミルは、きりりと表情を引き締めていた。

今日は魔法の練習と三階層へ行く予定だ。そして魔法の練習をする。

ギルドで確認したところ、なんとレベル四になっていた。新しい魔法の発現は一切無いが、旅立ちの日より前進した。

一人で心許無いが、行くしかない。

「おーい、お嬢ちゃん」

「お爺ちゃん先生！」

いえーいとやってきたのはヘテムルだった。

ふうふう言っているヘテムルに『水グミ』をあげると、ひよいと口に

入れる。

「こりや生き返るわい。もしやもしや」

「今日は探索ですか」

「お嬢ちゃん捜しにきたんじや。こないだ特上級の魔法書使ったじやろう？ 鐘が鳴ってのう」

「その特上級魔法と言うのは、魔法書にあったものですか？」

「そうじや」

ヘテムルは「うぷぷ」と謎の笑い声を上げる。こっちやおいでと手招かれ、後ろについて行く。一階層へ続く黒門の横に二人で座ると、涼しい風が吹き抜けた。

「ここは変わらないのう。ワシも若い頃はブイブイ兎狩りをしたもん

じゃ。——さて、お嬢ちゃん。特上級魔法を使ったこと、まずはおめでとう。どういう状況で魔法が使えたか教えておくれ」

「階層主」アイトレータが出たときの話をすると、ヘテムルは仰け反るほど笑う。

倒れそうになったので背中に手を添えた。

「窮地！　そして勝利は要らぬときた。なるほど誰も黄金の鐘を鳴らせぬわけじゃ。完全な呪文がこのような形じゃったとは」

呪文を見るためには相応の環境と心構えが必要となる。

ヘテムルは呪文を読めたためしがない。それは今まで出会った光魔法使いも同じ。

条件はわかったが、読む気は失せていた。

「いやあ笑った。ワシは帰るでの。今日は面白い話をありがとう。もし

興味があるなら魔法塔を訪ねておいで。この紹介状があれば、塔の門が開くでの」

そう言って灰色のカードを差し出される。

「魔法塔って王都にある魔法使いの住んでいる研究所ですよ。お爺ちゃん先生はそこに住んでいるのですか？」

「そうじゃよ」

「でしたら、私に光魔法を教えてもらえないでしょうか！」

「そりゃ無理じゃ」

そんな、とガックリしていると肩を叩かれた。

「お嬢ちゃんが一番光魔法が上手な魔法使いじゃよ」

「またまた」

「マジでマジで。ワシ、特上級の魔法書ほとんど読めなくての。風魔法のが得意じゃあ」

ヘテムルも先輩から本をもらったものの、持て余していたのだという。そういうわけならしかたない。

ミルは諦めて、ヘテムルを見送った。

気を取り直して探索再開だ。

「そして今日も、パーティに入れないのでした……」
ほろりと涙を飲む。

「回復魔法、回復魔法さえ使えれば……」

「ねえもんはねえ。あるもんで勝負しなア」

ミルクとお魚定食を置いた反動で浮く。

しおれていたミルはテーブルにくっつけていた頬を離す。

ある物と言えれば付与魔法と光合成魔法。頼もしいと言いがたい装備である。

「自分に価値がねえから組めねえと思ってたのか」

「う。はい……」

「パーティ組めなきや戦えねえか」

「攻撃魔法も、あるにはありますが……威力が心許無く」

三階層の土^{ランド・ビー}蜂は、同じモンスターなのに一階層に出現するものと違

い、恐ろしく強かった。何度も障壁を張り直して勝ったが、彼らの攻撃が自爆でなければ死んでいた。

最初に出会ったのが土蜂ランド・ビーでよかった、と心から思う。

「なら使い魔を買ったらどうだ。西通りに店がある」

テイマーが捕まえてきたモンスターのことを使い魔と言う。使い魔はギルドに許可証を発行され、領地内の移動も可能だ。馬車や荷物を使い魔に運ばせることもある。他には戦闘補助。文字通り、迷宮で共に戦う仲間となる。

攻撃力が足りず先も期待できないとなれば、別の場所から補充する。なるほど理にかなっている。

ミルは勧められたとおり、行ってみることにした。

西通りは落ち着いた雰囲気のお店が多く、日用品や食品売り場もそうだが、道具の修理屋が目立つ。

住宅街も近い。地元の冒険者が住んでいるのがこの辺なのだという。

そんな中、硝子張りの店頭を見つけたミルは中を覗く。

探していた使い魔販売店だ。

オスブル
海鯨の幼生や、東方でしか見かけない銀麒麟ウ・ヴァオージヤの子供が木箱の中ですや

すやと眠っている。他にも水槽や飼育箱があり、鳴き声も聞こえた。

「可愛いでしょう？ その子は乗れるし飛べるんですよ」

掃き掃除していた丸眼鏡の男性が、銀麒麟ウ・ヴァオージヤの子供を指す。

「私はこの店の店主、マーリンです」

そう言って青い目を細めて笑う。

「お客さんですよね？ よかったら中を見てってください。他にもたく

さん種類がいますから」

ほらほらと背中を押される。なかなか強引な人のようだ。

店内は綺麗だったが思った以上に広い。積まれた木箱のせいで倉庫に似ている。生き物の独特の匂いがした。奥には鳥や大型のモンスターもいて、そういうモンスターは檻に入っている。

「市が終わったばかりだから、品揃えは豊富ですよ。一年を通して売るので、今が一番充実してます」

「そのぶん高いですけどね」と茶目つ気たっぷりに笑う。

木箱や檻の中にいる使い魔達が、ミルを品定めするように眺めている。なにやら物々しい雰囲気にはびくついていると、何匹かが顔をそらす。そのとき馬鹿にされたのをミルは見逃さなかった。思わず凝視してしまうほど表情豊かな使い魔達だ。

「お客様はどんな子を探してますか？ 観賞用、愛玩用と色々ありますよ」

「一緒に迷宮に潜れる子を探しています」

「もしかして付与魔法使いでした？ よくいらっしやるんですよね！
でしたらこっちは」

世知辛い付与魔法使いの事情をさらりと流したマーリンは、迷わず奥へ進んでいく。

「この三匹がお勧めです。値段も手頃だし、レベル一ですから」

「モンスターにもレベルあるのですね」

「そりゃ大抵の生き物がありますよ。気に入った子がいれば、お金が貯まるまで取り置きできますし、どうします？」

「うぐう」

さすが手慣れた商人。ミルの懐事情さえ見透かしている様子だ。財布の中身を思い浮かべながら悩んでいると、説明が始まった。マイペースである。

「植物系のモンスター、黄色イエの貴婦人ロープは、見ての通り虫と植物が合体したようなモンスターで風魔法が得意。お値段は当店一お手頃です」

黄色い花卉がうごうご動いているようにしか見えないモンスターが、挨拶するようにふわりと浮く。

「隣はお化けグックト茸。毒鱗粉で相手を弱らせます。障壁が張れるなら、安全な所で死ぬのを待つのもありますよ。他には痺れさせたり混乱させたり、レベルが上がればいろいろ技が増えます」

赤と白の斑点が目^に毒々しいキノコがぴよんと跳ねた。足と、よく見ると短い手が付いていて可愛らしい。

「最後は夢^{スヤシープ}羊。状態異常や相手を眠らせる魔法が得意です。大人になれば騎乗できますよ」

手の平くらいのサイズだ。大人になるまで三年かかるので、一緒に冒険へ行くのは難しそうである。しかし「メエ」とアピールしてくるふわもこの毛を触りたい。

「おーいアホ店主！ アンタいい加減にしろよなー！」

扉を叩き割るような勢いで入ってきた冒険者は、小脇に抱えていた使い魔を放り投げた。

「うわっと！」

「返品だ！ さっさと返金してくれ」

「お客さん、何があつたんですか？ 高貴なる女王狐が何か？」

「夜中に奇声をあげて暴れるわ、川に突進して浮いたまま帰ってこないわ、言うこと聞かねえどころか役に立たねえよ！」

苛ついている冒険者は、夜泣きのせいで寝不足のようだ。塗つたような隈が目の下にできている。

マーリンは事情を聞くと金庫を開けた。

「はあ、これで三度目だ。お前、一体どうしたつて言うんだ」

高貴なる女王狐は、檻に入れられた途端、体を鉄格子に擦りつけて尻尾を振った。小さな狐に尻尾が九本ついたような姿で、毛は雪のように白く、目が赤いのが特徴だ。夢羊スヤシープに負けないモフモフした毛皮である。

「高貴クワイーンなる女王狐テイルなのに小さいですね」

「よくご存知ですね。こいつは体の大きさを変えられるんですよ。子供に見えても成体で、雪に紛れて掴まえにくいんです」

西の雪山にしか生息せず、滑らかな白い毛は高級素材。錬金術の素材にもなる。目を光らせていると肩を叩かれる。

返品した冒険者だ。

「止めとけ。むちやくちやうるせえから」

もともと高貴クワイーンなる女王狐テイルは大人しくて戦闘向き。騎乗もできるので冒険者に人気だ。しかし安いからと買ったら酷い目にあつたと冒険者は言う。

「アンタも冒険に連れてくなら別の使い魔にしたほうがいいぜ。面倒く

さくてもレベル一から育てるよ。おーい店主！ 代わりに夢羊スヤシープくれ。そ
このでいいから」

「毎度ありー」

なんと話を聞いているうちに売れてしまった。ショックを受けている
と檻から出された夢羊スヤシープが冒険者の肩に乗る。ではな、と言うように前足
を上げて挨拶された。たいへん愛想のいい子であった。

マーリンは魔石を取り出すと、ふわもこの毛をかき分けて首輪の魔石
に冒険者の血をつけた。これで契約完了だ。

溜め息をつきながら高貴クワイーンなる女王狐テイルを見ていると、気付いたのか顔を
あげる。

夜泣きが酷いというがどれくらいだろうか。兄に貰った音を遮断する

魔導具を寢床に入れば、夜は大丈夫かもしれない。

だめなら実家に送ろう。

家族は高貴なる女王狐の毛が採れて喜ぶだろう。実家には小屋があるので外でも飼える。

「ねえあなた、何か気に入らないことでもあったのですか？」

「キユン」

一鳴きした高貴なる女王狐は寄ってきて、擦っていた右の横腹を前足で搔き、舐めて毛繕いをする。かなり落ち着きがない。

痒いのかもしれない。

檻の隙間から指を入れて触ってみると毛皮の下はふわふわで滑らかだった。

「何してるんだ！ 危ないですから手を引っ込めてください」

「すみません！」

「噛まれませんでした？」

冒険者に頭を下げて見送っていたマーリンは、大慌てでミルの手を確かめた。

「主人登録をしてない使い魔の檻に手を入れると、たまに嚙り取られるんです。危ないので止めてくださいね。……こいつは買い取ったときも安かったんですよね。いい買い物だと思っただけだな。はあ……」

「あの、おいくらですか？」

「金貨五枚」

「嘘ですよね？」

「本当ですよ？ こいつは西からはるばる来たので輸送費もかかりますし」

「通常料金ですよね？」

「……はい」

しよっぱい顔をしたマーリンは項垂れる。

「銀貨五十枚なら出せます」

「ちよ！ それは暴利ですよ！ いくら何でも安すぎますって！」

「いや、先ほどの冒険者さんは金貨一枚と銀貨三十枚お返ししてましたよね？ しかも三回も返品される事故物件。安いと思って仕入れたけど、けつきよく高く付いちやったんじゃありませんか？」

「それでも五十枚は無いですよ！ 金貨一枚と二十五で」

「このままだと餌代もかさんでいきますよ。まあ、どうしてもその値段で売りたいなら、あつちの一番お安い使い魔をいただきます」

「ああ！　ちよ、ちよっと待ってください！　金貨一枚！」

一氣に二十五枚も下がった。

返品が相次ぎ、しかし貴重なモンスターだからと捨てられずにずるずる来ている流れだ。

半目になるとマーリンは項垂れる。

「ここで正直にならないと、お店の評判にも響きますよ」

実家が錬金貴族なのでそういうのには詳しいのだ。当然、客がどんな難癖を付けて値段を落とそうとしてくるのかも。

「そもそも高貴クイーンなる女王狐テイルの毛は高く売れるのに、どうして研究所に売

りつけないのですか」

「……実はその高貴クワイレンなる女王狐テイレル、何度も脱走した曰く付きだとかで」

それならばしっかりと管理し、売るときに冒険者登録をすれば逃げることはしない。実際に店の檻に入れてからは脱走することもなく、夜泣きもしなかった。一度返品された後は錬金術師に売ったのだが、同じ理由で帰ってきたという。

「仕入れ値はいくらだったんですか？」

「銀貨七十八枚です……」

「銀貨六十枚なら出せます。返品はなしで」

「う……お買い上げ、ありがとうございます」

そういうことで、ミルは高貴クワイレンなる女王狐テイレルを手に入れた。

登録をしたあと薬局に行って獣人用の痒み止めを買って塗ってみた。

ツンとした匂いを嫌がっていたが、包帯を巻いてしばらくすると、しきりに気にしていたのが嘘のように大人しくなる。腕の中で眠っているのを見ると、寝不足はなのは高貴クイーンなる女王狐テイルも同じだったのだろう。

宿に帰ってドーマに事情を話し、高貴クイーンなる女王狐テイルを木箱に入れ、内側に声が漏れないよう、魔導具を取り付けた。今夜は様子を見て、駄目そうなら蓋をして寝るつもりだ。

「名前はどうしましょう。ユキちゃんは適当すぎますし……。ブランカ……男の子だから却下。うーん、アルバムにします」

白という意味の名前だ。

ユキちゃんと変わらないが、お風呂に入ることにした。

「所持金はあと銀貨八十枚……貯金の目減りが凄いです」

お風呂から上がるとアルバムが起きていて、箱の中から頭を出していた。明らかに大きくなっている。

「キュン」

「わー！ 本当に大きさ変えられるんですね。あなたの名前はアルバムにしました。よろしくお願いします。それで、その痒い所をどうにかしましょう」

「キュンー！」

いらぬ麻布を床に広げると、飛び上がって出てくる。本人も痒くて大変なのだろう。

「キュア！ キュフツ、キュアア！」

誰もわかってくれなくて大変だった、としきりに鳴いている。

「じゃあ右側を上にして寝てください。頭がいい子ですね」

コロリと横になったアルバムを調べてみると、問題の部分が熱を持っていた。カミソリを出してそっと毛を剃っていくと、赤く腫れた皮膚が出てくる。引っ掻いたせいかと思っただが、拭くと一部がボコボコと動いて青く点滅した。

「キュワー！」

「ひえ!? ……これは青火あおびノミでは」

領地で蔓延まんえんし、家畜が大暴れしたこともあるノミだ。宿主に寄生すると痒み成分を出して暴れさせ、力尽きた所を食べてしまう最悪な奴である。

「これは明日、迷宮に行つて取りましょう。部屋の中では絶対無理です」

もがき始めたアルバムを押さえて痒み止めをたっぷり塗る。直ぐに大人しくなったが、一晩持つだろうか。ミルは半分減った薬瓶に顔をしかめると、必要な道具を買いに出かけた。

十

ウズル迷宮一階層。

川の近くで障壁を張り、ポーンラビツト角持つ兎に背後から刺されないように注意しながらアルバムを寝かせる。退治用の薬液を徹夜で作った。乳白色でど

ろっとしてゐる薬液はバケツに、黒い薬液は瓶に入っている。

手袋とマスク、ゴーグルを填めて体を洗い、首から下の毛を全部剃り落とす。

高貴なる女王狐クイーンテイイルと言うだけあって、アルブムは全身の毛を剃られて格好悪くなることを嫌がった。けれど青火ノミがどこに卵を産み付けているか判らないので容赦はしない。

哀れな格好になったアルブムは前足で顔を隠してしまった。ちよつぴり心が痛む。

「では特製パックをします。これで青火ノミの息の根を止めます」

「キュッ!？」

白いヘドロ状の液体を塗りたくって五分ほど待つと、表面がボコボコ

と膨らみ始めた。息ができなくて外に出てきたのだろう。アルバムが水に飛び込んだのは、対処法としてはあながち間違っていない。

「よしよし。我慢すれば今日からゆっくり寝られますからね」

「キュウツ、キュウツ——！」

くねくね動いているのを押さえながら更に十分経つと、表面が動かなくなつた。

そつと固まつたパックを剥がしていく。芋虫みたいな姿がこのノミの特徴だ。

「ひい。気持ち悪いです」

全部は死ななかつたようで、うぞうぞと動いているし、卵もびっしり取れた。まだ残っていそうだが更にパックをすると、五回目で表面がボコ

ボコしなくなった。反対側も同じように処理する。

「それでは、川で体を洗ってきてください」

「キュオーン！」

ようやくかと言いたげに飛び込んだアルブムは、水に体を擦りつけるように泳ぐ。

分泌液を洗い流せば、すっかり寛いだ様子になった。

赤くなった部分は元に戻っているが、表面は穴ぼこだらけ。

ミルは、遠い目になりながらも一つの薬液を見た。

死んだ魚のような目に、アルブムは言い知れない不安を感じる。

ちなみに青火ノミは宿主の死骸を食べ尽くすまで別の対象に移らないのが唯一の救いだ。

残りのパックを背中や足の隙間に丹念に塗って全て使用した後、バケツを洗い、水をくみ直す。そこへ黒い薬液をキャップ三杯分入れる。

「今からこの水で卵を完全に殺します。ちなみに液が足りなくなると、悲惨な結末が」

「キュ!？」

「大丈夫。パックでなるべくとったから足りるはず……です」

青火ノミは一気に捕らないと卵が孵化して元通りだ。

震えているアルブムをバケツに入れて丁寧に洗う。尻尾の付け根もお尻も丹念にすすいでいくと、どんどん水が透明になっていく。底にはどこにいたのと言いたくなるような卵の山が。今日は夕食を食べられないかもしれない。

ミルは何度も水をくみ直し、ようやく頭まで洗い終わった後、黒い薬液を捨ててバケツを洗った。

「アルBUM、残念なお知らせがあります……。たぶん体の中に残っています」

「キュオン!？」

頭のいい使い魔は耳の毛をぶわりと膨らませた。

『『水グミ』に薬液を入れるので噛んでください。今日のご飯にも混ぜます。便やおしっこが黒くなるまでやりましょう!』

「キュ、キュオ」

ぼわりと白い煙を上げたと思ったら、手の平サイズになってしまったアルBUMは、前足に鼻先を突っ込んで、しばらく打ちひしがれていた。

「そ、それで黒くなるのに三日もかかったんだっ。く、苦しいっ！」

食堂で五杯目の魚カレー定食をかき込んでいたシャリオスは苦しそうに仰け反った。口の周りにカレールーがべったり付いている。

「ギュー！」

「ごめんごめん。そんなに怒らないで。いいご主人に出会えてよかったね」

ひいひい言いながらギューギュー怒ったアルブムは、ツンとそっぽを向いて、生肉にかじりついた。薬液の染みた黒い肉では無くなったので

美味しそうに食べている。

「それにしても、よく正体がわかったね。青火ノミなんて聞いたことなかったよ」

「私も領地に出なければ判らなかつたと思います」

家畜が突然暴れ、次々死んでいく事件が発生した。原因がわからず呪いかと焦ったサンレガシ家だったが、死体から変なノミを発見。種類を割り出そうとしたところ、未発見だったので生態観察から始めなければいけなかつた。

薬液ができるまで、それはそれは大変な事態となった。近くの森に住んでいるウキキに体が痒くなったら知らせるように伝えるなどなど。

落ち着いた後、父親が学会で発表したのだが「へー、珍しいノミだ

ね」程度で見向きもされなかったという。

ドーマの食事を気に入っているシャリオスは、ときどき店に顔を出す。話はもっぱら迷宮のことで、ミルは行けない階層の情報を貰うお札に、知っている魔導具の話をする。

モフモフとした毛に戻ったアルバムは耳の裏を搔いてビクツとする。

トラウマが癒える日は遠そうだ。

けれど、すっかりミルに懐いてくれて冒険は上手くいっている。

アルバムが攻撃し、ミルはその補助に回る。最近はず壁の堅さを自在に変えて動かすことができるようになってきた。

「なんと本日、十階層突破です！」

「おめでどう！」

カレー皿とお茶のカップで乾杯した二人は、どちらも笑顔だ。

「五日で七階層も突破できるって凄いね。アルブムはどんな攻撃をするの？」

「突進したり、爪で引っかいたりです。たまに氷魔法を使うんですよ」
口から氷のブレスを吐くのだ。試しに水質を調べたら飲めるほど清んでいた。夏は水風呂をお願いしたい。

「そう言えば、西は水属性のモンスターが多かったね。パーティのお誘いも、もうすぐかもね？」

「やっぱりそう思いますか!？」

握りこぶしを作って希望に燃えているミル。

十階層突破は初心者冒険者にとって一つの壁だ。この壁を越えられる

かで先へ進めるかわかる。シヤリオスは昔を懐かしんで顔をほころばせた。

+

「しかし、現実には冷たいのでした……」

ほろりと涙を飲む。

「回復魔法さえ使えばー！」

「ねえもんはねえ。あるもんで勝負しなア」

ミルクとカツ丼定食を置かれたミルクは、テーブルに貼り付けていた頬を上げる。

ドーマが見下ろしていた。

「もう十五階層に行ったのですけど、全然パーティ募集に引つかからなくて。こっちから募集しても、声をかけてもすげなく断られて」

「今日の肉は昨日から下ごしらえした自信作だ」

「いただきます！」

やけくそのようにかぶりついたカツは熱々だった。

むせるミルの足下で、アルバムもカツ井定食にかぶりつく。雑食らしく、同じ物を食べていた。

現在、ミルはレベル二十七。アルバムは元々のレベルが三十四だ。

今の階層は得られる経験値が少ないため停滞している。

レベルが上がる理由や存在している理由はわかっていない。アカシツ

クレコードに印されていると言われているが、それ自体を目にした話を聞かない。全てはお伽噺とも言える、遙か古代へ繋がっているのだ。

ちようどユグド領に来て半年が経とうとしていた。

未だ新しい魔法の発現の気配すらなく、魔法書を読んで過ごしている。生活は安定してきたが、自分にできることが見つからない。

両親から何度も帰ってくるようにと手紙が来ていたが、全て無視している。

「アルブムだって仲間がほしいですよね？ 十五階層でゴーレムに囲まれたときは大変だったじゃないですか。ハンマー持ちがいたらするする進めますよ」

現在、ゴーレムが蔓延^{はびこ}る十五階層で足止めを喰っているミルはぼやく。

もう少しで死んでしまうところだった。

なぜパーティが組めないのか。原因はわかっている。

ミルに立った最初の悪評。そして使い魔のアルバムだ。普通、初心者冒険者が高貴なる女王狐を格安で手に入れられるわけがない。治療費もかかったが、元の値段に比べれば安いものだ。

アルバムを売ってほしいと言われる事も増えた。

つまりミルは、やっかまれているのである。面倒ごとに関わりたくないのは、どの冒険者も一緒だ。

「キュンキュンキュン」

「お金はまだありますけど……お休みですか」

「キューン！」

「そうですね。今日は迷宮探索を止めて街を見ましようか」

うんうんと頷いた一人と一匹は、それぞれ肉にかぶりつく。サクサクの衣がソースを吸ってしみしみになり、別の美味しさへ変貌していた。

十

ユグド領は迷宮があるため、いつも賑やかだ。店も揃っている。

故郷を思い出すと羨ましい限りだが、それに比例するかのようには争いも多い。

「気いつける！」

道の真ん中で喧嘩が始まり、慌てて下がったミルは人にぶつかってし

まう。肩に乗ったアルブムが威嚇するように尻尾を立てて唸っている。

「よしよし。びっくりしましたね。市場は終わったのに、凄い人です…」

「あー！ いたー！」

と、横から何かに衝突され押し倒された。

ふぎやと哀れな声を上げると、突撃してきた何かは慌てて立ち上がる。

「ごめんなさい！」

二階層で「階層主」アーティストタに襲われていた女の子だった。よく見ると弟がひつついている。

「あのときは助けてくれて、ありがとうございます！」

「ました！」

「いえいえ、どういたしまして」

二人はずっとミルを捜していたのだという。

ぺこーと頭を下げる姿に目尻が下がる。怪我也治ってすっかり元気な様子だ。

周囲を見回した二人が首をかしげる。

「あの黒鎧のお兄さんは？」

「シャリオスさんですか？ でしたらラーソン邸にいますよ」

「そっか、じゃあ会えないね。お礼を伝えてくれる？」

「ええ。もちろんです」

二人は手を振って去って行った。

そのあとは露店を冷やかし、郊外の川で魚を釣って遊んだ。観光地と

して有名な所も回り、ギルドの練兵場を借りて魔法の練習をする。

「アルブム、上手くなったと思いませんか？」

「キュン」

障壁の上で三回転ジャンプを決めているアルブムは鳴いた。障壁の堅さや大きさを自由に制御できる。

「へ大いなる光よ。我が魂は誇り。我が声に果ては無く。この体が盾ならば、我が運命に勝利は要らず。黄金の鐘よ鳴れ。その音は光ルイメン ≧！ …… やっぱりだめですかあ」

ピカリと光つては消える指先の魔法。

モンスターを目の前にしても発動しない。

「条件が整わないからでしょうか。使えれば十五階層も突破できそうな

のに……」

そのとき、迷宮ギルドから鐘の音が聞こえてきた。にわかには慌ただしくなった周囲を見回していると、職員がミルの肩を掴んで建物に入ると促した。

「緊急招集です！ ホールへ集合してください！」

中に入ると、人がごった返していた。

「迷宮二十階層に「階層主」^{アイトレータ}が出現しました。ジャンクゴーレムと思われず。希望者以外は退出を！」

「げえっ、俺無理だわ」

「一級冒険者に行かせりやいいだろうに」

ぞろぞろと退出する冒険者達に職員は唇を噛みしめる。その中に見

知った人を見つけたミルは、近づくこと尋ねた。

「スプラさん！」

「ミル・サンレガシ様？　いかがされましたか」

「あの、ジャンクゴーレムってどんなモンスターでしょうか」

「……二十階層に出るゴーレムの亜種です。すらりとした立ち姿に、魔法剣を使います」

そしてゴーレムのように堅い。既に犠牲者が出ているようで、緊急支援を求めた冒険者の要請により、事態が発覚した。適性レベルは三十七。現在二十階層付近の立ち入りを警戒させているという。

「ジャンクゴーレムに挑むには人数が必要です」

適性レベルにも満たない階層へ挑むのは危険だ。それはスプラもわ

かっているだろう。それなのに手を取って頭を下げた彼女は言った。

「もちろん一級冒険者の皆様にもお声がけしています。彼らが到着するまででもかまいません。どうかお願いします！」

「スプラ、それは職員として逸脱した行為だ。無理強いは止めてください」

「ズリエルさん……」

兵士服のズリエルが立っている。後ろには五人の兵士がいた。

「要請を受け、我々も参戦する。案内を頼みます」

「……はいっ」

招集された冒険者の中で残ったのは他に七人だった。ミルは彼らが出ていくのを見送った後、肩に乗るアルバムの背中を撫でる。行かないの

かと尻尾で頬を叩いてくるが、ご褒美にしか思えない。毎日手入れをした尻尾はふわふわだ。

「ギユ」

「わかってます。私達も行きましょう」

駄目なら引こう。

ミルは追いかけた。

彼らの足は速く置いて行かれないようにするので精一杯だった。見かねた冒険者の一人がミルを抱えて集団に追いつく。男性かと思ったが喉や背丈を見ると女性のようである。胸元がやや膨らみ、革鎧を着ている。頬に鱗があるので、おそらく龍族だ。縦長の瞳孔は銅色。勝ち気そうな

目で前方を睨んでいる。尻からは爬虫類のような尻尾が生えていた。下ろされたミルは彼女を見上げた。

「足手まといになるんじゃないやねえぞ魔法使い！俺はグズが嫌いだ」

「ありがとうございます！」

「はんっ！回復魔法は多いほうがいいだけだ」

「あ、いえ……聖属性は持ってなくてですね」

「お前何しに来たんだ!？」

ハハ、と乾いた声で笑う。

頭を抱えた冒険者は赤髪をひらめかせてミルの背中を殴った。

「まあいい。死なねえことだけ考えな」

そう言って集団のトップへ走る。

格好いいと目を輝かせているうちに一気に階層を降り始めた。

「どけどけ「階層主」^{アイトレム}討伐隊だ！ 開けねえとブチ殺すぞ！」

うわあ、と言ってしまいたいような怒声だ。冒険者達は慌てて道を空け、横から飛んでくるモンスターを牽制してくれる。

「皆さん優しいですね」

「キュン」

「お嬢さん、冒険者の方々は二十階層のことを知ってるんですよ。ジャンクゴーレムは小型で人ほどのサイズです。過去、階層が上がって来たと言う例もあつたので協力するのは当たり前なんですよ」

兵士の一人がそう言う。

「さあ、おしやべりは終わりにしましょう。十階層を超えます！」

十五階層から先はゴーレムの生息地とも言われる階層が続く。二十階層は一つの目安であり、適性レベルは三十を超える。

討伐隊の周囲を途中まで護衛する冒険者。道を譲る魔法使いに、合流する者もいて、集団が増えていく。

総勢二十名にもなろうかという頃、二十階階層へ続く黒門が見えてくる。

「各自臨時パーティを組め！ 数は四。後衛二人は階層の端まで下がり、前衛を一人護衛につける！ 周囲のモンスターに対応すべし！ また、一人はジャンクゴーレムに専念。危険だと思えば退避。後衛の前衛と交代しろ！」

短い指令の後、一斉に陣形が混じり、別れていく。

ミルが慌てていると腕を引かれた。

「サンレガシ様、あなたはこちらの後衛に入ってください。回復魔法が使える者と兵士が二人の四人パーティです。セオリーはご存じですか」

「ごめんなさいズリエルさん、まだ一度も組めてなくて……」

「それは我々の落ち度でもあります。承知致しました」

五つのパーティに分かれた。

二十階層は円形に広がり、横道が蟻の巣のように張り巡らされている。

モンスターは新たな侵入者の気配に顔を出した。

既に到着していた冒険者達が、円を描くように広がっている。おそろしく逃がさないためだ。

その中心にジャンクゴーレムがいた。

歯の無い口。喉の奥、手足の先までゴツゴツとした岩肌だ。体表は水色で、人のように関節がある。右手には炎の剣を持っていた。あれが魔法剣だろう。

「なあに、付与魔法使いって……。あー、あんたか」

ガックリと肩を落とした女性が前髪をかき上げる。

「私はローリイ。死なないように下がってればいいから。そっちの兵士は適当に攻撃して。回復は全部私がやるから。アンタは何もしないこと。

いいわね」

叩きつけるように言われ、ミルは頷いた。

唸ったアルブムをなだめていると、

「増援が来たぞー！ 前衛は交代し、治療に当たれ!!」

傷ついた冒険者と入れ替わる。

中心にいたジャンクゴーレムが吠えた。耳の鼓膜が破れそうな遠吠えだ。医師を摺り合わせるような不協和音に、思わず顔をしか顰める。

「水耐性が強い！ ゴーレムのセオリーは通じねえぞ！」

一人が叫んだ途端、ジャンクゴーレムが反応した。

目が無いから、音で反応している。

目をこらすと顔の側面に大きな穴があった。耳だろうか。

血の匂いに反応したモンスターが集まって来ている。回復魔法の使い手が一カ所に集まり、集中的に治療している場所もあった。

まるで野営地に現れた賊を退治のようだ。

「堅えなあ！」

大剣使いが振り下ろした刃が弾かれ、すぐさまハンマーに武器を持ち替えた。

ジャンクゴーレムは吠え、口から大量の炎を吐く。周囲を薙ぎ払うような炎の渦に、たまらず後退した前衛達に変わり、魔法使いが各々攻撃を開始する。直撃した魔法はしかし、ジャンクゴーレムに傷一つつけなかった。

「アルブム！」

「キュン！」

白い煙を上げ、本来の大きさへ戻ったアルブムは突進した。ミルの背丈を超えたアルブムがぐつと体を縮めると、九本の尻尾が膨らむ。

「キユオオオー！」

「よくやったぜ！」

吐き出された氷のブレスが、ジャンクゴーレムの足を凍らせた。片足が鈍くなったゴーレムに、前衛が飛びつくように肉薄する。全身に剣撃を浴びながら、ジャンクゴーレムは冷静と言えるほど単調に、凍り付いた足を地面に叩きつけた。

氷が粉となって落ちていく。

「クツソが！」

弾き飛ばされた冒険者に回復魔法がかけられていく。ジャンクゴーレムは高く飛ぶ。地面が揺れ、クレーターができる。足場が不安定になった冒険者達はたたらを踏み、怪我人も出た。

も現れ、多勢に無勢。数が必要だと言ったスプラの言葉をようやく理解する。

腕を回したジャンクゴーレムは一番近い冒険者から順に襲い始めた。音を立てていなくとも、まるで目があるかのように。ゴーレムは本来足の遅い生き物だが、ジャンクゴーレムは違う。全ての弱点が覆されている。

ジャンクゴーレム
節操無しの岩人。

なぜその名が付いたのか。百聞は一見にしかずとはこのことだ。

水で動きを封じることができたが、ミルは属性魔法を使えない。別の手で封じ込めるには関節を狙うしかない。

「ズリエルさん、援護をします。アルブムをよく観察してください！

《《ウォール障壁》》

「キュン！」

体を一抱えほどのサイズに変えたアルバムはミルの張った障壁にのると、ぽんと飛び上がった！

「《《ウォール障壁》》」

「いったいなにを——」

十六枚の障壁はジャンクゴーレムの周囲を囲むように展開される。障壁を踏んだアルバムは跳ね、ジャンクゴーレムに襲いかかった。それは天井をも地面に変えたような縦横無尽の攻撃だ。

「アルバム、関節を狙ってください。右からどうぞ！ 《《スロウ鈍足魔法》》」

逃れようとしたジャンクゴーレムの関節部分に灰色の障壁が刺さり、

動きが一瞬止まる。すかさず一撃が入り、右肩が凍り付いた。

「《障壁》、《魔法攻撃強化魔法》！」

障壁が赤い光を吸収し、それを踏んだアルブムの体がほの赤く光る。

「なるほど。付与魔法付きの障壁。触れれば効果ありか」

動きの鈍くなったジャンクゴレムを見て、ズリエルが走り出す。魔法攻撃強化の効果で、攻撃が通り始めた。付与魔法は重ねると相乗効果をもたらす物がある。魔法攻撃強化もその一つだ。

攻撃を始めた一人と一匹に釣られるように冒険者達が殺到する。慌てて障壁の位置をさげ付与魔法を飛ばす。

「オオオオオオ！」

「《光障壁》！」

掬い上げるように杖を振り、岩を吐こうとする口を塞ぐように障壁で顎を突き上げる。

口の中で魔法が炸裂する直前に解除したジャンクゴーレムが、敵を見つげるために首を振る。その隙を冒険者達は見逃さない。

「畳み掛ける！」

「おお！」

堅い表面が削られていく。引き倒されたジャンクゴーレムは立ち上がることを許されず、指の端から砕かれていく。

二十階層の討伐は三時間後に決着した。

「サンレガシ様」

「お疲れ様でした、ズリエルさん」

青ポーシオンを置いて、ミルは息を吐く。長い闘いでくたくただった。他の冒険者は倒したモンスターを解体している。

「魔法攻撃を防いだ手腕、見事でした」

「ありがとうございます。その、何もするなと言われていたのにすみません」

ローリイは肩を竦めると自分のパーティーへ返っていった。彼女にも固定で組んでいる人がいるようだ。

「この後は解散でしょうか？」

「ええ。ジャンクゴーレムは全て持ち帰り、分配されることになります。本来ならばもっと時間がかかっただろう一戦でしたが、サンレガシ様の

おかげです。今日の一戦を見て、冒険者達があなたを見る目も変わるでしょう」

ふとズリエルの言葉が止まる。表情が変わらないので判りにくいですが、先ほどより真剣な雰囲気だ。

「未だあなたの不当な噂を流している人物を特定できていません。お氣をつけください」

それは例の猫人族のことだろう。

もしかしたらユグド領を離れているのかもしれない。

「おいアンタ。ミルつつったか」

それはミルを討伐隊まで運んでくれた、赤髪の女性冒険者だった。

彼女は眼前で仁王立ちすると、銅色の瞳で品定めをしてくる。

「レベルは。そっちの使い魔もだ」

「ええと……私はレベル二十七。アルバム三十四レベルです」
なぜ聞かれるのか。

警戒し始めると、今度はズリエルに尋ねた。

「おい【番犬】、こいつの素行はどうなんだ」

「その呼び名は好かんから止める。サンレガシ様は見ての通りお優しい方だ」

「だどいいがな。——アンタ、何しに迷宮へ来た」

「自分にできることを見つけるためです」

「なら俺と一緒に三十四階層へ行っちゃくれねえか」

静かに告げられた言葉には懇願が込められていた。女冒険者は前髪を

かき回すと、懐から赤い宝石を二つ取り出す。

「俺は【火龍の師団】つつーパーティーを組んでたが、濁流の都でメンバーとはぐれた」

三十四階層の別名「濁流の都」。

そこで【火龍の師団】は壊滅状態になり、彼女の両親も帰ってこなかった。散り散りになったのは「階層主」^{アイトレータ}に出くわしたせいだという。

けれど龍族には宝珠があり、血縁者は生死がわかる。その宝珠が、彼女が見せている赤い宝石だ。

「くもり一つないってことは、死んでいない証拠なんだ」

何度か【火龍の師団】で搜索をしたが「階層主」^{アイトレータ}が行く手を阻んでい

る。

「親が生きている理由はわかってんだ。食料庫に保存されてる」

そして二週間ごとに入れ替えられるのだそうだ。行方不明になったのは十日前。あと四日しか残っていない。【火龍の師団】はギルドに救助クエストを出した。メンバーを集め、最後の救出策戦に臨もうとしている。「どうして私に声を？」

「アンタの乗れる障壁は動かせるだろうか？ 俺達の目的は救出だ。あれが使えれば戦わずに助けられるかもしれない」

どうだと問いかけられるが、そもそも三十四階層に行くのが無理だ。

「改めて名乗ろう。俺の名はユーギ。返事は明日まで待つ。ギルドホールまで来てくれ」

そう言って、彼女は身を翻した。

帰宅したミルは、貰ったジャンクゴーレムの素材を並べる。深いネイブルブルーだ。光に透かすと内側から光っているように見える。魔力を帯びているのだ。

「送ったらきつと喜ぶわ」

ミルは小包に手紙と共に入れると封をする。ギルドへ持っていけば、実家へ送ってもらえるのだ。料金が高いためシエツドのように配達人を雇うのが主流だが、ミルは臨時で代筆の仕事をしたのもあって、そのままギルドに頼んでいる。

そうこう考えていると夕食の時間になったので降りると、甘いタレの香りがする。

「こんばんは、ミルちゃん」

店内で一番暗い席に、シャリオスが座っていた。べったりと口の周りにタレをつけたまま振り返り、スプーンを振っている。今夜はうな重だ。

喜んで席に着くと、ドーマがおひつを置いて行った。お米よ無くならないでと一口食べたミルは神に祈る。付け合わせの漬物がまた美味しい。

「ここのご飯、本当に美味しいよね！早くラーソン邸出たいな」

「出られないのですか？」

「パーティ組まないと駄目だって」

誰に言われたのか知らないが、しよんぼりと眉を下げている。

「シャリオスさんはソロなのですか？ 引く手数多だと思いののに意外です」

「それがね、組んだ後、皆いなくなっちゃうんだ。僕が怖いんだって」
「ますますしよぼくれてしまう。」

何やら怪しげな流れになってきたぞ、と美味しいご飯を咀嚼している
と、チラチラと窺うかがうように視線を寄越してくる。

「ミルちゃんは普通にしてるけど、僕のこと怖い？」

「怖くはないですけど……拐かされそうな雰囲気があります」

「酷い!？」

健全なのにと主張するが、顔にソースが付いていなければドキドキしてしまう御尊顔だ。まるで中身が伴っていないが。

(痴情のもつれでしょうか。皆さん気を遣っているのかも)

見るだけで心を吸われそうな淫靡な吸血鬼なのだ。元々吸血鬼は美貌で異性を引きつけて魅了し、血を吸うと言われている。

最近ようやく耐性が付いてきたが、ふとしたとき、うっかり失神しそうになる。迷宮でそうなったら致命的だ。だから怖いと言われたのかも
しれない。

一人悩みながらうな重を噛みしめて味わっていると、シヤリオスはその間に三回おかわりをした。

ドーマの宿は今日も客がおらず二人きりだ。どうやって経営しているのだろう。永遠の謎になりそうだ。

「そろそろ帰るね。お代はここに置いとくから！」

「あれっ、シヤリオスさんは後払いですか」

「何杯食うかわかんねえからな」とドーマに言われ納得してしまう。するりと影に潜ったシヤリオスが消えるのと、新しいお客さんが入ってくるのは同時だった。

「五人前ください！」

「五人前ください！」

「俺三人前！ お前は二人前でいいよな？」

「食えないわよ！ ドーマ、一人ね」

「外に漏れていたかぐわしい香り。私の鼻に狂いはありませんでした。

……神よ！」

たまに食べに来る五人組。パーティだった。

まるで逃げるかのようなシヤリオスの逃走。

そう言えば十五回しかおかわりをしていない。

訝しく思っていると、こちらを見た赤髪の女冒険者が目を剥く。

「アンタそれ一人で食べたの!？」

「おー？ 見ないうちに食欲の秋か？ 成長期か？」

「人様の胸を見ないでください。失礼ですよ」

二人が揃って視線を下ろせば、緑髪の女性が後頭部を叩いて止めさせた。どうでもいいが、ユグド領は赤髪の女性が多いので、緑は珍しい。

「申し訳ありません。うちのパーティーが」

「い、いえ……」

悶絶している二人を睨んでいる背後では、無言でうな重を早速かきこ

む二人がいた。鬼気迫る様子である。そんなにお腹が減っていたのか。

「じゃあ何でおひつが十五個も積み上がってんのよ！」

それは全てシヤリオスの腹の中である。

「この過食キッズ共を足したような量を食べる人数が、ドーマの宿に来るわけないでしょう!? うちのパーティ全員食い過ぎなのよ金が足りな
いわ！」

「ナチュラルに失礼だよな、お前。もういいから食おうぜ。腹減っちゃ
まったよ。やったー！ 久しぶりの肉だ！ 魚肉だけど！ もやし炒め
ばつかじゃ腹にたまんねーよな」

そう言って灰色の髪の毛の冒険者は、す……とテーブルに座り、過食キツ
ズの仲間になってしまふ。バタバタする赤髪の毛の冒険者を引きずり、後を

追う半目の緑髪の冒険者。とても仲のいいパーティだ。ミルは羨ましくなった。

「キュン」

「おかわりですか？ 一人前追加でお願いします！」

「って犯人はアンタなの!？」

二つ目のおひつに鼻先を寄せていたアルバムは「キュ？」と一瞬だけ振り返る。実はシャリオスと相席しているときからいたのだが、静かなので気付かれていなかった。

積み上がったおひつが十六になった。

勘違いしつつも謎が解けたので、赤髪の冒険者は静かになった。

やれやれである。

食べ終わったミルクは身長と諸々が増えますようにと念じながら、食後のミルクを一気飲みする。

「三十四階層に潜るなら、泊まりか」

おひつを両手に重ねたドーマの問いかけに、おやと顔を上げたのは緑髪の冒険者。彼女はちらりとミルクを見て首をかしげた。

「記憶によれば半年も経ってない新米のはずです。失礼ですが何かのご依頼ですか？」

「お前騙されてるぞきつと。迷宮内で犯されてモンスターの餌にぐえっ」

「食事中に下半身に類する話しするの、止めてください」

「ぐおおおお鳩尾に入ったあああ」

「ぶふー。アンタ馬鹿すぎい」

馬鹿にする仲間もしつしと追い払い、彼女は促す。

事情を話すと難しい顔をする。

「その動く障壁とやらに興味はありますが……ソロ冒険者に嘆願するとは、よほど有益か人手不足ときているようです」

「あれでしょー？ 【火龍の師団】って一級冒険者パーティでしょ。こないだへまして一軍が丸ごといなくなっただって。落ち目なのに弱り目に祟り目よね。関わらないのが最善でしょ。シャリオス・アウリールからの手練れなら話は別だけど」

どうもシャリオスは一級冒険者の中でも目立つ存在のようだ。さすがだが……行き倒れのその後はどうなったのだろう。本人が何ともない顔

をしていたので聞かなかったが。

今度会ったら聞いてみよう、と明後日のことを考えているうちに話が
進んでいく。

「生きてる仲間が食われるのを待つってのも御免だけどな。俺なら行く
かも」

「本当にアンタって馬鹿よね。自分の命以上に他人が大事なわけ？」

「だってさー。これで死んだら、夜まともに寝られなくなるじゃん？」

「馬鹿なの？ 死ぬの？」

「と、これが一般的な冒険者の見解です。さて……レベルは存じませんが、別パーティと同行するのは危険です。同じ店のメシを食った仲間よ
くよくよく考えてください、とだけ申し上げておきます」

「は、はい……」

もともと断るつもりだったが、少しだけ胸がチクリとする。

部屋に戻ってお風呂に入った後も、わだかまる何かを抱えたまま眠れなかった。

翌朝、断りを入れてもユーギは責めなかった。

その次の日も、またその次の日もミルは迷宮に潜り、魔法の訓練をし、とうとう十五階層を突破——しかし達成感がない。

「おい、聞いたかあの話。【火龍の師団】の」

今日の買い取りを終えて歩いていると、話が聞こえてくる。

ここ最近、【火龍の師団】の噂話を聞くと、対足を止めてしまう。無駄

に三十四階層までの地図を購入し、モンスターの種類を勉強したり……
気にしていると、いい加減認めなければならぬ。

行ってどうなると思うが、別れ際のユーギの力ない目が気になってい
た。

「けつきよく人数集まらなくて救助活動は無しになったんだろ？」

「それがよ。一人で行っちゃまったって」

「誰が？」

「ユーギだよ」

「っその話、聞かせてください！」

飛びかかるように詰め寄ると、二人の冒険者は仰け反った。

「お？ おお……【火龍の師団】が仲間割れしたんだ。こういうとき龍

族ってのは可哀想だよなあ。血縁は何より重くってよ」

「一人で行ってでも犬死にだ。一緒に行った奴を見たか？　ありや完全に迷宮で殺されるぞ——っておい！」

転がるようにギルドを飛び出す。

頭が真っ白になっていた。

後ろに続くアルブムはやれやれと尻尾を振って大きくなると、背中に押し上げる。

「ユーギさんを追ってください！」

「キュアキュ」

濁流の都は難所の一つ。

なだらかな丘や岩場が続いた先に見える灰色の大河は、ユグド領をも飲みこむ面積があると言われている。その中で次の階層へ続く門を見つめるのは至難の業であり、最初に突破した冒険者は三年かけたという。

モンスターも水妖系へ変わり、幻想的だが厳しい環境に適応した、強力なモンスターが立ちほだかる。

しかし取れる素材の価値は跳ね上がる。上質な肉は食べれば活力や様々な効能の商品になり、鱗は頑丈な防具に、目は魔導具の貴重な素材に、牙は剣にあつらえ、もしくは貴族の館に飾られる。

ここを稼ぎ場として見ている者も多い。

「つくそ！ 足下見やがったな」

舌打ちしながら剣を振るう。ユーギはこの広い三十四階層で一人戦っていた。

雇った冒険者は、落ち目の【火龍の師団】と仲違いしたユーギを見殺しにしても報復は無いと知り、彼女をモンスターの前に突き出すと、それまで採った素材や金を奪い去った。

周囲を巨大なクラーケンやスライムに囲まれ舌打ちが漏れる。もともと勝算は薄かった。三十四階層に来られただけでもよかったと思うべきだ。

しかし、両親や仲間を助けない。

「この身に宿る龍の加護。日輪の加護よ！」

練り上げられた魔力が闘気となり、体を強化し活性化させていく。瞬く間に切り伏せられたクラークン。核を割られたスライムが、泥水となって広がった。

「なっ！」

息を吐いた瞬間、隙を狙っていたかのように、横合いから出てきたハサミがユーギの胸を掴む。ビーフギャングという、カニの大型モンスター。とっさに剣を挟んでいなければ真つ二つにされていた。牛肉味で美味しいと評判だが見た目より強い。

「ちくしょう！」

しかし未来を先延ばしにするだけだ。ユーギには助けしてくれる仲間がない。脳裏に笑っている両親の顔が浮かぶ。

泥濘んだ足場で踏ん張りが効かない。

「ちくしょう——！」

「周辺は押さえませす、行ってください！」

「キュン！」

白い何か横切ったかと思えば、ビーフギャングのハサミが噛み千切られる。唸るようなビーフギャングの声。自由の身になったユーギはとっさに剣を構え直し、飛び出している目を切り飛ばした。

背後にいたのは、一度助力を断られた相手。真っ白な尖り帽子と装備を付けた、魔法使い。

「っお前、どうしてここに！」

「次が来ます！ アルブム、ユーギさんが体勢を立て直す時間を稼いで

ください」

言葉と共に投げ寄越されたポーシヨン。瓶には付与魔法《回復増加魔法》^{ヒールアップ}がかけられている。飲み干すほどに、負った傷が癒えていく。

「キュオオオ！」

突進したアルブムとまともにぶつかったビーフギヤングの甲羅が砕け、絶命する。血の臭いに誘われたモンスターがぞろぞろと顔を出し始めた。「ジリ貧だ。いったん下がって体勢を立てなおす！ お前ら、俺の後に続け」

「わかりました！」

ユーギはモンスターの少ないリトルスポットへ走り出した。

三十四階層のリトルスポットは小さな洞窟の中にあつた。

リトルスポットとは冒険者達の休憩所として使われる、モンスターが少ない場所のことだ。存在しない階層のほうが多く、あまり人が来るとモンスターも寄ってくるので、秘匿されているだけかもしれないが。【火龍の師団】も見つけたリトルスポットを内緒で使っていた。

「足を休めろ。作戦会議をしたい」

物珍しさに周囲をうかがっていたミルを呼びつけ床を叩いたユーギ。大人しく一人と一匹が座ると、頭を下げた。

「さつきは助かった。礼を言う。それで、アンタ達はなぜ来た」

「悪い人達にユーギさんがついて行つたと聞いて……あと、救助の話

も」

「……明らかに駄目な冒険者に引つかかるたあ、俺も目が曇った」

苦い顔で俯く。

両親の救出が断念されたのが、よほど効いたのだろう。

「だが、諦めたつもりはねえ。恥を忍んで頼むが、俺と一緒に行ってくれないか！」

更に深く下げた頭を見て、ミルは厳しい顔を見ると首を振る。

「私は自分を守らなければいけません。ここまではアルバムに乗ったから何とか降りることができましたが、アートレクター「階層主」相手に立ち回る実力はありません。……失礼ですが、お互いにそうですね？」

「まずは話を聞いてくれ。アートレクター「階層主」は巨大な水妖系モンスターだ。

バニッシャー
灰色の王という」

「名前だけは聞いたことがあります」

トドのような形をしているが、鱗やヒレは触れただけで身を引き裂く。巨大な津波を起こし、三十四階層を飲み込んだこともある危険なモンスター。

三十四階層の三分の二が河で、更に下層へ流れている。灰色の王は河の中に潜んでいるので普段は現れない。ユーギの仲間達を助けるためには灰色の王の食料庫へ向かえばいいが、既に一刻を争う。鉢合わせになる確率が高い。

「普通なら船しか手が無いが、アンタの障壁で空から行ければ河を渡る必要がない。ここには飛行系モンスターはいないし、仲間を救出きたら

すぐに逃げる。灰色の王と鉢合わせになったら、その時点で諦めて帰還する」

しばし考えたミルは、ここ数日の自分を振り返り頷いた。

話を断つてから、探索にも身が入らなかった。ここで引き返しても同じだ。

「やるだけやってみましょう」

「そうと決まれば行くぞ！」

これでよかったのかと悩みながらも差し出された手を取った。

断ったときとは違い、ユーギの目に光が戻っていた。

障壁の上にユーギと共に乗ったミルは、恐る恐る動かす。上空から食料庫を目指すには、ある程度高さがなければ意味がない。

食料庫の場所はユーギがわかるという。宝珠があるからだそうだ。

進むほどに腐敗臭が濃くなっていく。アルブムも行きたくないはずに皺を寄せていた。足下には死んだモンスターや冒険者の残骸がぶかぶかと浮いている。灰色の大河は見た目通り汚く、碌な水ではなさそうだ。もったりとした水は大量の泥を含んで、溺れたらすぐ窒息死するだろう。

「あれだ！」

ユーギが前方を指す。切り立った岩場の上に赤い旗が見えた。周囲に道となる物は一切無く、遠目でも倒れた冒険者が確認できる。

声をあげて呼びたかったが灰色の王がどこパニッシャーにいるかわからない。

障壁を動かしながらそっと近づく。

静かだった。不気味なほど動かない冒険者達を見回し、早足で両親と
思われる龍族にかけよるユーギ。

他に生きている冒険者を探したが、十人中六人が事切れていた。
間に合わなかったのだ。

装備の一部を回収したミルは、マジックバッグにしまう。

「直ぐに離れましょう」

ユーギの両親は強靱な龍族とあって、まだ意識があった。ポーシヨン
と栄養剤を交互に飲ませると、ようやく立ち上がる。

「まさか、本当に来るとは……我が娘ながら無謀の極み」

「小言は後にしてくれよ！ 母ちゃんと一緒に帰ろう。ほら、あいつが
ミルとアルブムだ。力を貸してくれたんだ」

「この度は愚女共々世話になった。俺はギスカ。妻はマルジャ」

【火龍の師団】のメンバーではないことに、ギスカは何があつたか悟つたようだった。けれど何も言わず頭を下げる。くすんだ赤道色の目が親子で同じだ。妻のマルジャも、洗えばユージと同じ髪色になるのだから。

栄養状態の悪い場所で、食べ物は岩場に生えた苔だけだったという。直ぐに手持ちの食糧も尽き、体力のない者から死んだ。

もう一人はポーションも栄養剤も飲ませたが、意識が戻らない。頬はこけ、痩せ細っている。

「まだ終わっていません。アルブムに乗ってください。縛ります」
なんとか準備を終わらせたときだった。突如海面が盛り上がる。

「パニッシャー灰色の王だ！ 高く登れ!!」

「ウォール《障壁》!」

見えたときには灰色のモンスターが大口を開けていた。

ミルはアルバムに啞えられながら障壁を動かす。人数が増えたぶん、魔力がごっそり抜けていく。慌てて青ポーションを飲み干した。

このままでは持たない。

崖の上の死体が、岩ごと嚙り取られていく残酷な光景から目を離し急いで戻る。

しかしパニッシャー灰色の王は侵入者を逃がすつもりはない。ぎよろりとした大きな目を巡らせて、海面を長いヒレで叩き、飛び上がってきた。

「なっ!」

大河のほとんどは泥だ。水を叩くよりよほど飛べる。

失念していたミルは汚濁の飛沫から身を守るように障壁を張った。

「キュン!!」

アルブムが吐いた氷は灰色パニツシヤの王に弾かれる。

「目を瞑ってください——《目眩フラッシユまし》!」

爆発した光が視界を焼く。驚いた灰色パニツシヤの王は水しぶきを上げながら大

河に飲まれていく。

「今のうちに行きましょう!」

「だめだ、行く手を阻まれてる!」

鋭いユーギの声にはっと見ると、水面に見える影が、三十三階層へ続く門への道に集まっていた。大量のモンスターだ。

「灰色の王のおこぼれを狙っている」

苦々しく言うのはギスカ。この階層は食べ物が少ないため、モンスターは共食いか冒険者を襲うのだという。

そうこうしているうちに灰色の王がモンスターを飲みこむ。

この階層は強いモンスターばかりなのに、それでも生き残るのは少数だ。つまり食料庫は灰色の王が狩りに失敗したときの保険なのだ。

灰色の王は常に腹をすかせている。

ポケットから取り出した『水グミ』を指でのばして遠くに投げると、直ぐに気付いた灰色の王が食いつく。海面に落ちた途端、餌食だ。

抱えた三人を置いて行けば——ミルとアルブムだけならば逃げられそうだ。だが目的を達成できない。

「アルバム、全力で走って！ 道は私が作ります！」

魔力が切れた瞬間が、このパーティーの終了だ。五人と一匹の命が、ミルの行動にかかっている。

「《光ライト》！」

出現した光球を水面ギリギリに泳がせる。気配を感じた灰色バニッシャーの王が追いかけて始めた。反対側に遠ざけていく。

「《鈍足魔法スロウ》！ だめです、通じませんっ」

「レベルが足りないのよ」

かすれた声で言ったのは、妻のマルジャだ。

「あまりにも懸け離れていると、効果自体が薄くなるの。特に魔法は顕著よ」

「かあちゃん、体力が無くなるから黙っててくれ！」

「ごめんなさい、ユージ……」

ふ、と目を伏せてしまう。彼女もげっそりと痩せ、顔は青を通り越して白くなっている。

モンスターについて、もっと調べておくべきだった。

ミルは撤退のため杖を振る。《移動補助魔法》を使いアルバムの移動速度を上げ、自分には《感覚強化魔法》をかけた。障壁は出すだけのほうが魔力消費が少ない。

ひよいひよい障壁を飛び移るアルバムに啜えられながら、《光》や

《止まれ》などの魔法を使い、モンスターの目を眩ませることに徹した。

アルバムは張られた障壁を踏み抜くように駆け抜ける。

大河から岸边に降りた途端、モンスターが集まって来た。《光》ライトが消えて、目標を失った灰色の王が襲ってくる。

「強行突破するぞ！」

切り込みはユーギが担い、モンスターの群れを駆け抜けた。

リトルスポットに逃げこんだとき、もう一步も動けなかった。膝から崩れるように倒れ、頬にアルブムがすり寄る。

下ろされた三人は、ユーギが持っていた物資を分けあった。もう一人、気絶したままの男性がようやく目を開けたが、朦朧としている。速く地上に戻り、手当を受けなければ手遅れになりそうだ。

ユーギはリトルスポットをそっと出ていき、早々に帰ってきた。

「今日は進めない。入り口にモンスターが集まっている」

パニッシャー
灰色の王が大暴れし、避難しているのだろうとユーギは言う。これでは他の冒険者が入れない。

「せめて俺の槍があればな……」

「あなた、それは無しよ。私の杖もないのだから」

焚き火をして作ったスープを勢いよく食べる夫婦の横で、ユーギは男性に根気強く飲ませている。彼の名前はアルトと言うそうだ。兎の獣人で、茶色の耳をしている。

「お嬢さん、俺はもう駄目だから置いて行ってくれ……これじゃあがれない」

「無駄口叩いてないで、メシを食ってきつさと治せ。お前は助かるんだ。俺が保証する」

ミルは自分の食料を確認する。三日分あるが、一人分の量だ。

上層へはアルブムに乗って強行突破すれば、一日で抜けられそうだ。

しかし弱ったアルトはミルより大きい。背負って歩けない。アルブムに乗せれば戦力が半減する。

「他の冒険者に、助けを求められませんか？」

「足下を見られるか……。駄目な奴に当たれば、今度こそ抵抗できない」

「……そうですか」

裏切られたユーギが言うなら、そうなのだろう。ミルも自分がいい評判を持っていないことを知っている。

数時間の休憩を挟み、目を覚ます。体感では早朝。眠りは浅かった。

軽く乾パンをかじりながら一階層までの地図を広げる。一番安全なルートを探さなければ。この中で一番情報を多く持っているのは誰だろう。見回したミルは、アルバムにくつつくように眠っている夫婦——マルジャを揺すり起こす。

「奥様、起きてください。擦り合わせをさせていただきたいのですが」
昨日、彼女はミルに情報を提供した。体力があるうちに話をしたかった。

「う……。すり、あわせ？」

「帰還ルートの確認をしたいのです」

「わかったわ」

寝ぼけ眼がすつと冷える。

マルジヤは目を細めて地図を見た。彼女に乾パンと水を渡すと、昨日より体力が戻ったようで、咀嚼が速い。

「まず最短ルートを教えてください。そのあと、モンスターの出現が少ない場所も」

「ここを歩きます。今の状態だと、こっちが——」

尖った爪が示すままに線を引いていく。

最短ルートならば今日中に外に出られるが厳しそうだ。

悲しい事に武力が足りないし、体力が続かないだろう。迂回ルートも一か八かだ。やはり他の冒険者を見つけて交渉し、て物資を分けてもらう必要がある。上層まで同行させてもらえれば僥倖だ。

「十五階層まで行けば、後は最短ルート……」

それまでは迂回し、モンスターとの戦闘を避けるべきだと言う。

方針は決まり、ミルは全員を起こす。ギスカは体も大きく重いので、なるべく歩いてほしいが無理そうだ。三人をアルブムに乗せ、障壁で十三階層への門を目指すことになった。

「なんだ……昨日とは打って変わって、モンスターがいない？」

門の周りにひしめいていたモンスターが消えている。巣穴に戻ったのだろうか。それにしても食い散らかされたような跡が残っている。不気味だった。

「あそこだ、門がある！」

ユーギが指す方向へ障壁を飛ばす。

泥濘む地面に着地した——とたん地面の底が盛り上がった。

「キュン！」

「《障壁》^{ウキール}！」

とつさにミルを啜えたアルブムが大きく飛ぶ。

地面の底から^{パニッシャー}灰色の王が現れた。

「こいつ、地面に潜って待ち伏せしてたのか!？」

「アルト、しつかりしろ！」

はっと見ればアルブムからずり落ちたアルトが落ちていく。とつさに障壁で受け止めたミルは全員を連れて上昇した。

^{パニッシャー}灰色の王は再び地面に潜り、もう一度飛び上がってくる。

「水気が多くなつたせいで、地面が柔らかくなっている。岸边をならしたのか！」

ユーギは齒がみした。引き上げたアルトはギスカが掴んでいるが、再びずり落ちそうになる。そして青い顔で泡のような物を吐き出した。

「あ、あなたつ！ 酷い熱よ！ これじゃ、もう持たないっ」

「——！」

ギスカが咆吼した理由はわからない。

だがミルは心臓に突き刺さる何かを感じた。

「△大いなる光よ。我が魂は誇り。我が声に果ては無く——」

すでに三十四階層で逃げ場は無い。門は目前。

飛び上がる灰色の王パニッシヤーから、今度こそ逃げられない。

殺意に塗られた目が見えた。底冷えするような恐怖が足下から這い上がる。ユーギが父親に、父親が家族を抱き込んだ。アルブムが氷の息を

吐こうと口を開けるのがゆっくりに見える中、ミルは幾度も失敗した呪文を唱える。

成功するだろうか。

しなれば、どのみちパニツシヤ灰色の王の腹の中だ。

「——この体が盾ならば、我が運命に勝利は要らず。黄金の鐘よ鳴れ。

その音は ルイメン 光 ≪ ！」

体に走った光が指先から真っ直ぐパニツシヤ灰色の王に絡まった。光は灰色の王パニツシヤの口に巻き付き、締め上げる。尾もヒレも全てを封じるように伸びた。

「行ってアルブム！ 最短ルートで全員を送ったあと戻ってください

い！」

「ギュー！」

「アルバム！」

唸ったアルバムをもう一度叱咤する。するとミルを障壁の上に下ろし、ユーギを唾えると、猛然と走り始めた。

「待て、戻れ！」

黒門をくぐる刹那、藻掻くように手を伸ばすユーギに笑ってみせる。

「私の魔力が切れるか、あなたが勝つか、それとも応援が来るか——根比べをいたしましょう」

ぎよろりとした目が、ミルを睨んでいた。

「くそっ！ 主人を見捨てるとは、離せ馬鹿使い魔が！ 恩人を見捨てるなど龍族のすることではない!!」

「ギュルガアアア！」

黙れというように、アルバムはユーギを壁に叩きつけた。

「う——ぐア!？」

「ギユアアアア！」

そして倒れたユーギの胴体を啣え直す。牙が防具を突き破り、柔らかい腹に食いこむ直前で止まった。足を止めた一瞬を取り返すがごとく、疾走する。

「はあ、はあ……」

パニッシュヤー
灰色の王は陸上でも活動できる。エラ以外にも呼吸方法があつたのは残念なお知らせだ。膝が笑う。

時間が経つにつれ魔法の感触を掴んできたが、相手の動きを縛るほど魔力を持っていかれる。レベルが上がって魔力の基礎値が伸びていなければ、すでに腹の中だったろう。

そして魔法を使おうとすると、光の糸が邪魔になった。杖を持ってないのだ。

ミルは、ふと光の糸を動かせることに気づく。ゆっくりと右手の小指から親指へ糸を束ね、左手へ移動させていく。早くしなければ次の手が

打てず死ぬ。

灰色の王が緩んだ拘束に気付き暴れだした。

「ううう！」

光の糸を全て左に移し背中 of 杖を抜く。呪文を唱え、乗っている障壁を左にずらす。飛び上がった灰色の王の攻撃を間一髪で避けた。

心細くて怖かった。丸一日立ち続けているような気がするが、本当は十分も経っていないだろう。

体感時間の長さに震えながら、負けるなど己を叱咤する。

恐怖に負ければ、迷宮に飲まれてしまう。

『水グミ』を取り出して青ポーションに浸す。そして《回復増加魔法》を重ねて飲み込んだ。薄まった青ポーションの味がす

るが、減った魔力が回復していく。

これなら長期間持つかもしれない。

しかし特上級魔法が成功した理由は何だろう。成功したのは二回とも「階層主」^{アイトレータ}と戦っているときだけだ。自分より高レベルモンスターが相手ではないと使えないのだろうか。わからない。そう何度も窮地に陥るのはごめんだし、試そうともしなかった。

「帰ったら、もつと魔法の幅を広げないと」

自分を励ますように呟いている間に、別のモンスターがちらほらと顔を出し始めた。灰色の王^{バニツシヤ}が藻掻いたのを見て、今のうちに逃げようとしているのだろう。大河へ向かっている。

と、中の一匹がミルに向かって飛んできた。エビっぽい何かだ。ミル

の身長の半分はある。

「《光障壁》——なっ！ 《障壁》！」

とっさに跳ね飛ばそうとした魔法が不発に終わる。慌てていつもの障壁に切り替えて防ぐと、そのモンスターは着地と同時に別のモンスターとぶつかり、争いになった。共食いを始めたのを気味悪く見ながら、早鐘のように鳴る心臓を押さえる。

「……今、魔法が使えなかった？」

失敗か違う要因か、震えながら唱える。

「《光障壁》……嘘でしょう」

何の現象も起きない。魔法が失敗したときに起こる魔力暴発さえた。

背筋に嫌な汗が伝った。

暴発したときの現象が起きない。だが《光障壁》ウォール・ルクスは二度も失敗した。魔力は減っていない。しかし《障壁》ウォールは使える。

違いは光魔法と無属性のみだ。

「《光》ライトは点きました……」

光を遠くに飛ばし、モンスターの目から自分を隠すように障壁を移動する。青ポーションをもう一口飲む。

光魔法は使えた。

ミルはもう一つ違いに気づく。

光合成魔法は唯一の攻撃手段。もし他の属性魔法を持っていたら確かめられ——いや違う。

『勝利は要らぬときた』

ヘテムルはそう言つて笑つた。

そしてもう一つ、

「魔法を解くことができない……!」

光の糸は指先一本に集約できたが——切ろうとは思わないが、切れないのだ。

魔法使いとしての勘が言っている。これは敵を滅ぼすか、自らが死ぬまで絶対に解けない諸刃の剣だと。

「代償付きの魔法。それが特上級魔法なの……?」

この体が盾ならば、我が運命に勝利は要らず——勝つための力を失う代わりに、盾となる力を得る。

それが光ルイメンの正体だ。

アルバムは走った。疾走と呼ぶに相応しいほどに。

背中に乗った生き物が落ちそうになれば尻尾を巻き付ける。最初からそうしていればよかったと今ならわかる。

そしてモンスターを蹴散らし、壁を蹴り、門を抜け、休まずただ一つの目的のための存在になり果てた。

後方に全てを、主人を置いて行き、目的を果たして帰るのだ。

アルバムが一階層へたどり着いたとき、くたくたで膝から崩れてしまった。背中の荷物を下ろし、啞えていた一匹を投げ捨てる。

「ま、て！ 待て！ その状態で行っても死ぬだけだ」

「ギョルグルル！」

「ポーシオンを飲め」

差し出されたポーシオンと青ポーシオンの試験管を咥え、アルブムは仰け反った。液体が喉を通った瞬間、力が戻ってくる。頭を振って瓶を投げ捨てる、乾いた音を立てて割れた。

「二人とも、ここから先は自力で立ってくれ！ アルトを頼む」

「わかつている。《剣を懐に、我が栄光の光を託す》」

「《剣を懐に、我が栄光の光を託す》。行きなさい、龍の仔よ」

「確かに受け取った。——行くぞアルブム！」

母親に背中を叩かれ、ユーギはその背に飛び乗った。嫌がるアルブム

を急かしたその体には、両親から受け取った闘気魔法が巡っている。

ここぞという場所で龍族が使う固有種族魔法、自分の力を一時的に貸し与える魔法だ。

渡した者はその間、レベルによる恩恵も全て渡す。一般人程度の力しか出なくなるので、そうなると騎乗すら危うい。

迷宮を出ていたからこそ唱えられたのだ。モンスターの脅威さえなければ、アルトを運ぶくらい朝飯前だ。

「俺を連れて行け。そのほうが速い——《この身に宿る龍の加護。日輪の加護よ》」

ユーギを通り、アルブムの体に三人分の力が流れこむ。

「キュオオオオ！」

ふつふつと込み上がる暖かさに身を委ねるように、アルバムは再び疾走した。

十

ミルの体力は限界に達しようとしていた。

丸一日が経とうとしている。

幸いなことに灰色の王の動きも衰えつつあった。絶食しているせいだ。
弱っているのはお互い様というわけだ。なんとなく面白かった。

ミルは貴族の令嬢だった。今もそうだが冒険者に傾いている。

馴染んできている自分も面白い。嫌だとも恥ずかしいとも思わない。

ただ恐怖で頭がおかしくなっているだけかもしれないが、昔より胸を張れると思う。

ミルは恐怖に勝つため考え続けている。その成果が少しずつ体と噛み合ってきた。魔力の効率的な運用の仕方や、パニッシャーの王の動きを観察し、上手く避けている。

その間、冒険者が一度も通りかからなかった。出入り口にパニッシャーの王がいるせいでと予測する。状況が伝わっているのだろう。

「でも、誰も来なかったら……考えては駄目！」

アルブムは戻ってくるだろう。そのとき死んでいなければ再会できるに違いない。

滝のように流れた汗が冷え、体力を奪っていく。

障壁の上で杖を頼るように座りながら、かすむ目を開き続ける。

「——！——！」

何か聞こえる。

幻聴かと思った。

しかし視線をやったとき、そこには高貴なる女王狐と、騎乗するユーギがいた。

「キューン！」

待たせたなとアルバムが鳴く。

そして走った勢いのまま、灰色の王に体当たりした。

「え」

凄まじい勢いで灰色の王が飛んでいく。あの巨体が、一瞬とはいえも

んどり打って。

「今のうちに逃げるぞ！」

「ごめんなさい。倒さないと、魔法を解くことができないのです！」

「ハアア!? なんだそのクソ魔法は！ ちっ、とつとと片づけるぞ！」

剣を振り抜いたユーギは打って変わって元気な様子。そしてアルブムの背中から降りると凄まじい勢いで灰色の王パニッシャーに襲いかかる。

「陸に上がった魚に勝機はねえ！ テメエが怖いのは水の中だけだ！」

目の瞳孔が縦に伸び、髪がぶわりと膨らんだ。尾を一振りし、舞うように挑む姿は、剣舞のようだった。目で追うのがようやくのそれに見とれていると、アルブムが近づいてくる。

背中に乗り毛皮を掴んだ。

「アルバム、ありがとうございます……!!」

「キューキュツキュツキュ」

ペロリと頬を舐めた。

「今の俺は、いつもの三十倍強え!」

今のユーギは一級冒険者二人の力を与えられている。反対に弱った灰色の王はまともに動けず拘束されたまま。

見る間に鱗が削れ、目をくりぬかれて灰色の王が死んでいく。凄まじい剣戟に他のモンスター達が慌てて逃げていく。

「こんなもんか。この際だ、とつとと素材剥いで帰ろうぜ」

三枚におろされた灰色の王は、あの恐怖が嘘のように骸を晒す。

啞然としてみると、剣を納めたユーギが振り返った。

「なあ、ミル・サンレガシ。俺はグズが嫌いだ」

バニッシャー
灰色の王の骸に触れながら、そんなことを言う。

困惑したミルに、ユーギは苦笑う。

「だが今回グズなのは俺だった。周りが見えていなかった。お前を危険に晒したこと、許してくれ。俺が責任もって、お前を地上まで連れて行くから」

「……はい。お願いします！」

バニッシャー
そうして灰色の王の素材を持てるだけ持って、討伐は終了した。

ドーマに大目玉を食らった。いかな冒険者も、冒険するときには情報はもちろん、準備を整えてから進む。

今回のミルは、あまりにも無鉄砲だった。

ユーギを裏切った冒険者達は、その後捕まった。追放刑よりも重い、労働奴隷として働くことになるという。契約違反と迷宮での裏切り行為もそうだが、ユーギから物を盗んだことが、一番重い罪となった。

バニッシャー
灰色の王は一日食べないだけで激しく弱体化するとわかって、三十四階層に挑む冒険者が増えた。どうやって餌絶ちさせるか盛り上がっている。

アルトは一命を取りとめた。だが二度と迷宮に入れなくなった。食料庫のことが心の傷となり、思い出すだけで震えが止まらない。元気に

なったら【火龍の師団】の拠点管理をして過ごすそうだ。

「あなた達には、感謝しているわ」

「娘も、俺達も助けてくれた。驚いたぜ。まだ到達階層が十五層だったとはな」

ユーギは「悪かったな」ともう一度謝った。

罰則はないが、低レベル冒険者を適性レベル外の階層へ連れて行くのは、褒められた行為ではない。必要な準備を終えて、高レベル冒険者がいるなら話は別だが。

「私も軽率でした」

「ところでさ、ミルはパーティ組んでないのか？」

「え!?! え、ええそうですか」

ドキリと視線をそらす。

「まあ、付与魔法使いだもんな。俺もお前に会うまでは、魔法使い以下の存在だって舐めてたぜ。だけど、お前みたいなのもいるんだな」

「ふふ、この子ったら最近あなたのことばかり話すのよ」

「ちよ、かあちゃん！」

「それで、よかったら俺達の【火龍の師団】に入らないかと誘おうと思っただが」

「え!?! 私は是非とも——」

「一回故郷に帰って、鍛え直すことにした」

「はへっ」

変な声を出したミルの頭を、ギスカが乱暴に撫でる。

髪がくしゃくしゃになったがそれどころではない。たった今パーティーに誘われた気がしたのだが、気のせいだったのだろうか。

「救助を断念した奴らとわだかまりが残った。主力が抜けただけで崩れるようなパーティーは、いずれ全滅する。今度はどんな逆境にも動揺しない精神を持たせる」

そう言っただけで娘の尻を叩く。「このっ！」と尻を押さえたユーギが父親を睨みあげた。

「あんたには本当に痺れた。低レベルながら灰色の王相手にパニッシャー一歩も引かない根性。肝が据わっている。ウズル迷宮に戻ってくるとき、まだ一人だったら俺達のパーティーに入ってくれ」

「そ、それはいつでしょうか。一週間？ 二ヶ月？」

「がはは！ 五年はかかるだろうな」

「そんなに遅くねえよ！」

「おお、頼もしい。本当にそうなればいいがな」

「くっそ親父っ。それじゃあな、ミル」

すっかり元気になった親子は、そう言つて去つて行く。

半泣きになりながら背中が見えなくなるまで見送つたあと、我慢できずに叫ぶ。

「また、パーティ組めませんでした——！」

「キューン」

「何で!？」という叫びが青空に吸い込まれていった。

～創作おまけ話～

ユーギ達【火龍の師団】は海を渡った別の国の出身です。武を極めるためいくつもの迷宮を踏破し、やってきたのがウズル迷宮です。

アルトは迷宮がトラウマになってしまいましたが、助けてくれたアルバムと領内で再会し、一緒に遊ぶようになりました。そのうち少しずつ回復し、モンスターと戦えなくても一緒に過ごすことはできると世話をする仕事を選びました。

アルバムは最初、アルトを子分認定していましたが最後は友達に昇格します。傷ついていると判っていたので、アルトが国に帰る日は心配で見送りに出かけました。

そのときもらったブラシはアルバムの宝物入れにしまわれています。

ときどき出して、ブラシをかけてもらうのに使っています。



※サンプルはここまでです。